

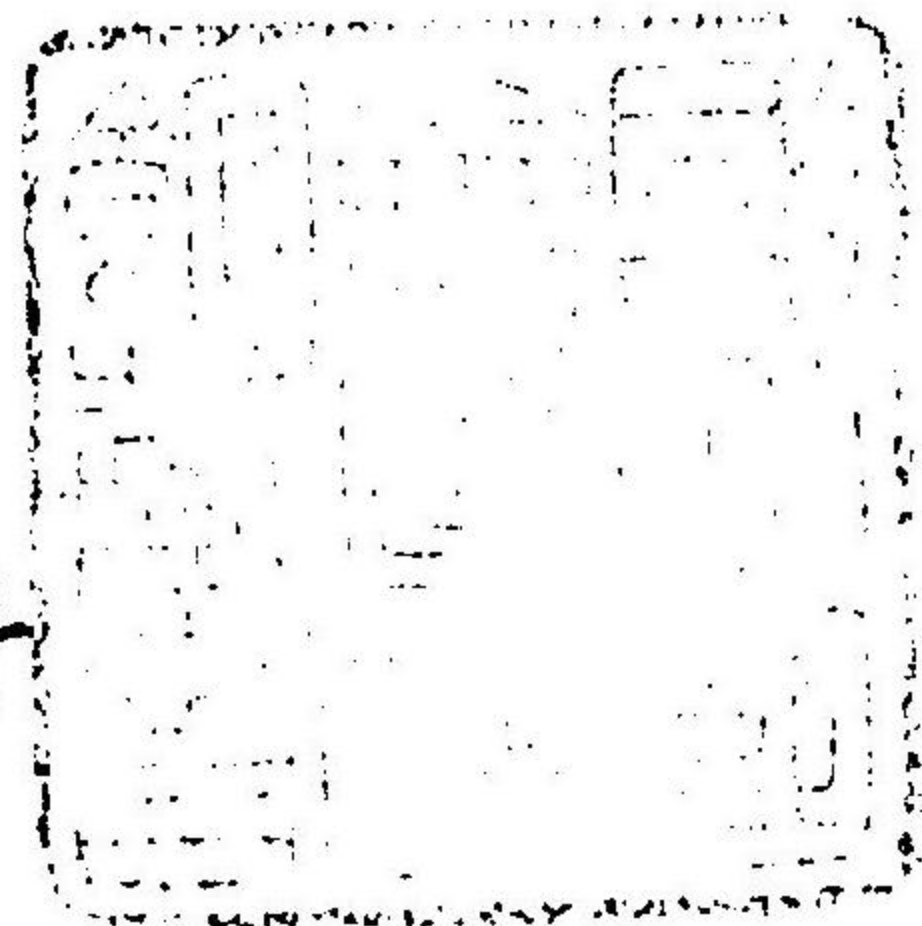
42N35

戲曲
叢書

15

高尾
三世三河白道
八百七
卷

912.4 Ki 235y



912.4
Ki235y



336945

八百屋お七

上巻

紀



木のはしと誰片意地な筆吟み。それは浮世と捨坊主。是は煩惱菩提所の。寺は華麗の大書
 院唐戸前平戸違棚。掃ちぎつたるどり帯塵に交れど法性の。水は濁らぬ瀧川のこひに小姓
 の吉三郎。遊びがてらに挽く茶臼。眠たふらふと人目には。見へて眠もせぬ憂き事に。花
 の姿も羨れ行く。君と濃茶に口切の。主は誰様お七様。たつ名は實にも本郷の。八百屋の
 花袖松茸の。若も何れ初物の。縁は可笑や假初の。過し火難に此寺へ。親子主從厄介の。
 内のもやくく氣もつゝす。普請も出来て駕籠の。つかい情なき水離れ。立ても居てもあら
 れねば。切てお顔と拜みにと。親の跡追寺参り。釋迦も見許し玉銚の。道のいどりれし
 かるし。襟繕るふてていやつて。座敷へ出れば君が顔。見るよりはつと氣上りし。ち杉や
 最うおじや何と往まいの。髪と弄いつ手と撫つ。もぢくするも迂のしく。ままお初心
 な何ぞいの。親御は後生願がい小。お前は小性ぬらがいに。あたふたと取急ぎこんな尊と

い首尾へ来て。ありの戀が初めでも。何が耻のし御座んすと。背中をついと押遣れ。轉るゝるのゝ機にして。とんと後へ持れ寄り。てちだとのへと手と取ば。吉三郎振のへり。うへ、お七様お久しや。道も忘れず今日の御参詣は奇特なり。併御親父久兵衛様お袋様は。二時も先より参つて御座るのに。跡へさがつて何ぞ又味な趣向があつたもの。聞けば毎日堺町木挽町への御遊山に。歌舞妓若衆の美くしい姿で。うまい狂言と御覽じた目で。私などか抹香斗りどめ袖に。飽の來たのは御尤。戀のいろはと教へても。手が悪ければお師匠と。變て嫁入遊ばすげな。目出度事じやと氣と持す。お七はさすが正直の。顔と赤めて涙ぐみ。藝文くされ何のらの芝居へ足も向ませず。心に立て男猫さへ。膝に抱たる事もない。此方様こそは方々のら。女子の弟子が附たとやら些どの内に大人びて。小頼の悪い此口が私は因果で可愛いもの。何處へ嫁入とする物ぞ。お前は頓て坊様に。ならしやんすとの取沙汰が。氣懸りで成ぬ故互の固めしやう爲に。起請と差出す。吉三は頓て戴いて忝けない。兎や角云ふたは皆偽はり。誠と見する誓詞とば。只今致して進じやうと柵より料紙硯箱。筆れつ取て書く所へ。新發意常香盛として。後の方に立覗き。吉三様何さし

やる。上人様の曼陀羅と遊ばと筆で勿躰ない。穢らはしいと咎められ。はつと下に差置いて辨長。其方は先より其處に居て。様子は何も聞やらぬの。お七様のかつしやるは。曼陀羅が欲しけれど。お師匠様へは憚りのりな。身共にとのれ望み故。書ふとしたが何とした。如何にもそんな事そふなが。お七様のら遣しやつたは。浄土の一枚起請とやら。有難そふに戴いて。此方は宗旨替る氣の曼陀羅書どおしやれども。そりやわんだらと笑ひける。お七は頓て手と取て。何見てもく可愛らしい坊様じや。巾着でも紙入でも。欲しくば縫ふて進じよぞや。ちよつと見た事聞た事。云ぬ物じやと賺せども。中々頭打たさ。愚僧今年十二才出家の道と相守つて。女の手より物取れば。五百性か其間手の無い者に生れます。又嘘つけば獄卒が鐵の鉄刀で舌と抜く。それでは日頃好物な薩摩芋が喰れぬと。こまつけられず立去す。取付く虫の辨長や花の嵐と持餘す。杉は捉まへ出來ました。目に入る様なお前でも出家侍佛の使者。位ひの高いお人じやが。それでも此處へたつた今幽霊が出現したら。懼ろしがつて泣しやるがの。うねつな事とば云やるのふ。其幽霊と浮めて遣る胸に修めた法華經の。八卷町の比丘尼の少と棺桶のつまつたが。迷ひと成て幽霊が其處な

丸太の間合のら。出たと深達罪福相浮めてやつたといき過た。習はぬ經の談義口しつゝい
 普留那の辨長様。是のら私が咄そふと膝に抱寄せ聞ひしやんせ。此方の隣に分限者の作り
 倒れがあつたげな。男は去年の正月に初の子産で死れたげな。跡で後家御が奢られて傾城
 狂いとしられたげな。揚錢の見入にて節季と云ふ鬼になり。慾に眼が光るやら身代に尾が
 見ゆるやら。額に江口くら橋の大根程な角生た。くき桶に入れ其家のはしりの脇に埋ん
 だけな。其執心で夜々は家鳴震動雷電し。天井板がむちくく。梯の子がぐはたぐ
 く。四方の壁がどろくく。モッ此咄置てたも。どうやら面白なさそふな。ハッまあ跡と
 聞しやんせ。又膳棚がぐはらぐく。庭の薄がざはくく。明り障子がぼうつと焚。
 其中のら幽霊が白佛程化粧ての。鐵漿は烏羽色髪うつ捌き逆様に。屏風の蔭にふよつこり
 と。顔差出してけらくく。ハッくくハッ。笑ふたげな。家内の者が一時に。ハッくくハッ。目と眩
 せば。小坊主は狼狽て彼方へ向けば向ふのら。又其顔がによつと出る。此方へ寄れば後
 のら。毛の生た手で撫廻す。仰向けば二階のら。俯伏けば簀子のら。是は成ぬと廻廻り。吉
 三が袖に顔差入。法蓮華經も本道も。附ふ藥の無い首尾と杉が氣轉の手療治に。引抱へさ

て風呂敷の小袖と取て辨長が。顔に起請と早々と。先よい事と書院先。硯と取て樽椽より
 濡縁あるこそ嬉けれ。互に向ふ顔と顔彼方に抱ば此方にも。懼ろしがりて抱つてお題
 目よりね經より。如是本末や屈竟の子供と欺す方便品。膝の間より坊主首によつと出して
 見たくく。れりや見付たど駈寄と杉も續て走り寄り。其處と彼の幽霊が後より引摺み
 なふ恨めしや其方故に。多くの屋内が世話とやく。小行過たる小坊主めと。まづ此様に抱
 へ帯くるくくと目と巻て。執念と聲でやい其處な。二人の者は忙然と何狼狽て立て居
 る。其方では無い此方へヒヤ。彼方へめりのない。帯解事も時に寄るついちよくく
 と寝る物と。氣と付られて。領いて飛石傳い漸々と園の内へ入れれば。さあ仕済した幽霊
 も最早冥途へ歸るとて。搔消やうに方丈へ逃て形はなありける。辨長一人うろくくと。杉
 こりや何とする事ぞ。めんないちどりの合點じやと。座敷一間と舞歩さ吉三殿お七様。そ
 ぎくくと呼へども。返事なければ鉢巻と。そつと外してこりやとふじやと。邊と見廻
 し打領さ。起請と出して押戴さ。一ッ杯陥たと思ゆるが。其裏喰せ此方には。吉三の袖の
 内に有るこれして遣た。能い氣味じやと。打笑ふたる後には。萬屋武兵衛太左衛門。先よ

り様子聞濟し。新發意爰に何してじや。エ、お二人様お参りの。久兵衛様も先にのら客殿に御座ります。お出と云ふて駈行と。是辨長殿。此方が只今戴ひた文と身共に下されい。束もない事斗り。忝なくも是はな。お七様と吉三郎戀慕れ、つの起請とやら。お前が貰ふて何さしやる。キ、其お七と吉三めが起證じや故に貰いたい。其替りには常々に欲しいと云れたる。木佛の大黒と布袋屋骨牌一面じやが。何と背中叩のれて。是や談合が面白いが。欺のすのじや御座らぬや。何の嘘とば吐物ぞ則ち太左が請合じや。歴々の証據人そんなら遣と差出せば。武兵衛悦び請取て是さへあれば此方の。戀は叶ふた手に入たと。兩人吐やき入にけり。辨長は只一筋に武兵衛様必らずや。明日とも云はず晩のらは六助が部屋へ往て。二文四文のよみ打つてしやのに契りと結ぶの神。お七が戀のにくずしと。知らぬ事こそ悲しけれ。主従のちなみは流石深編笠。用有りげなる侍の玄關に彷徨て。頼みましやうと云ひ入る。折節住持は方丈へ吉三伴ひ出給ひ。何人なるぞ用有らば此方へと有りけるに。答へて編笠と取て彼處に入れれば。十内殿か久しい先申さふ。御主人には。不慮なる事の御浪人殘心推量仕つる。吉三は親子の中なれば嘸歎のふと存たに。流

石は學問精に入れ出家に染る程有て。世界は無常と曉めて頓着も致さぬ段。去とは奇特に存すると。執成あれば十内は。満悦至極の御詞それと申すも上人の。日頃お教示有る所謂就ては主人源次兵衛。浪人せしは何故とお耳へ入しは知らねども。自分に於て一合も非道の沙汰は致さねど。若殿の御難義と救ひ申さん爲斗り。私欲の科と身に被り武士の虚名と請たる事。更々悔み候らはず。それに付ても吉三郎出家の願ひと只管に。貴僧様へ申上げ剃髮染衣の姿とば。篤と見届け立歸れど。拙者と差越候と慇懃に相述る。上人暫し領いて苦勞の中にもそれ程に。子は大切な物じやよのふ。成程く今日にも出家致させ申さふと悦ばしげなる返答と。胸に手と置く吉三郎兎や角思ひ廻らして。真中へすつと出。珍らしや十内。叔某か出家の事御師匠仰せ有る通り。心に待兼おつたるが今其方が咄と聞き。忽ち心底蹴へり二度武士になる思案。先一通り承まはれ。父源次兵衛若殿への。忠義に浪人致せしと若殿御満足に思召し。御身持直れば浪人せし甲斐あらん。然れども此趣さ大殿御存じなき時は。親たる人空奉公とした道理。某國へ立歸り隠れし忠義と顯す事。今日遁世致とより抜群の孝行と。詞飾るも好色の嘘に馴たる徴なれ。十内涙と袖に受多くの書物

と見擴げて。深き道理と思召す御所存感じ入たるが。武士の作法は外の事。主の善悪願みず討死するも世の習ひ。其處に差別は無い所お前が奉公お望みでも。不届者の世倅とて親殿御抱成れまい。申開もならぬ筈。とごとく歸り給ふのは理に上塗する同然。能々思し直されよと理と正せども。イヤく身共が勘當受たのは大殿も御存有る。左われれば親とは他人なり。其他人の某が奉公望むが誤りの。何の遠慮有るべきと。云せも果す是吉三様。勘當と云立に御奉公ある此方なら。孝行顔もいらぬ物。と云ふやられた前の御胸中。紛らはしうて吞込れぬ。是も非もいらぬ。發心とさ成るゝか成れぬ。返答次第拙者めが分別ありと疎り寄る。上人は聲と上げ。マ、氣が短のい。十内殿武道の仕宜は其元に如何様とも捌のれい。法師の道は此方へ預け置るゝ筈の事。數ならねども師と頼む愚僧が差圖致す義と。吉三も否とは申すまい。世話とやのすど緩りつと。心鎮めて語らしやれ。こりやく辨長茶持て来い。非時も拵らへ煙草盆酒と銚子よさんくの。中に立たる御師匠の心遣いぞ殊勝なる。然る折節方丈より八百屋久兵衛親子連。續いて武兵衛太左衛門。住持の前に會釋してお暇申と立出る。エ、こりや各々お歸の。最前より此處に居て御挨拶もせなんだ故。武

兵衛殿や太左殿は定めて酒が足すまい。ね客も心易い仁能う御座るわい遊ばしやれ。平にくと止むれば兩人は立止り。久兵衛殿聞しやつたか。御遠慮のないお方と有る。然らば次手に今の事れ寺へお咄致しやう。武兵衛殿それはまわ今日に限らぬ事。噂や娘も連たれば暮ぬ内に往たいが。御座れと云ふも聞ぬ顔是非なく共に立戻る。兩人は上人の膝元に畏まり。御酒は望みに候はぬが。急にお知らせ申度。白くは是なる吉三郎親御は名有る武士とやら。承ればだいそれた事仕出して。此頃追放せられた共。縛首と討れたとも口々の取沙汰故親の子なれば。如何様の義が御座らふも知れませぬ。片時も早く暇とば。仕はされたら能あるふと憚りながら存す。マ心遣は忝し先達て其事は。愚僧も聞て居まするが。世間の沙汰とは裏表様子はわけて云れぬ義。苦勞に思ふて下さるな。ハくくいやそれはお寺へ遠慮してとり合せ云ふ最負口。其横着さ非道さは聞も身の毛の慄つ事。吉三は不便に思へどもれ寺には替ませぬ。云ふても御合點ないならば。無理に吉三と引出と。太左と身共兩人が睨合せて置ました。マ吉三立て行と傍若無人に罵しれば。住持顔色損じつゝ、兩人存外千萬な。出家の弟子は子も同然。其吉三郎と我儘な雑言は何事ぞ。難義か悪りや

師弟とも此寺と開く分。其方の世話にやしませまい。お手前斗りが檀方の。不出来な座配と呵られて。何にも御存知ない故に御魚負が一概な。お前は弟子と思そふが。お七と云ふて。彼に居る娘が吉三のお内義様坊主の女房と冷笑ふ。久兵衛夫婦腹と立それや武兵衛殿何云やる。大事の娘と吉三には誰が仲人で嫁入たぞ。鹿相な事はおしやるまい証據と見よと立懸る。はて喧ましう云ひでも此方おらお目に懸けるとて。件の起請取出しこれ讀まする聞のつしやれ。其方様に御出家と。止さすおらは此方に。嫁入致し候まじ。次に色々神おろしよし様参るお七より。何と云と聞より。吉三は袂打振いはつと斗りの風情なり。お七はおろく涙ぐむ氣色もいづれ笑止なり。久兵衛目鼻としのめつくくと打守り。疊とたき身と震はしやい其處な徒ら者。いつの間にまわ此様な大膽な義と仕出して大勢の真中で親に面耻のせまる。すつばのかはな若衆が。此久兵衛が僅なる家一軒と見込にて。仕懸た戀に載られたな。大膽氣め盗人めと彼方と睨み此方とば。引摺寄せてさんくりに打る、杖の下よりも。お七は吉三と打見遣り。吉三は此處に居ながらに消も失たさ心なり。住持は暫し黙然と涙と隠し居られしが。稍在て是御夫婦。全たくお七に科もなく

吉三か徒らしたでもなし科人は此坊主。お七が爰に居られし節。はれたいけな發明な娘の子じやと思ふおら。戯れ事と二三度も申た事の候が。女は何處やら愚にてまんま事のと某へ送るふとがな思ふた。しどけ無ふして拾はれて。なき名負ふたる不便やと。衣にかつる涙こそ二人が袖にわのるらじ。武兵衛は急て大胡座はお寺様。御魚負が余まり過て勃とする。鳥と驚になされうが起請の文字は化されまい。是御覽せと投出と。いや見る迄も無いか手前が。最前讀だ文言に。其方様に御出家と止さすおらとは無あつたか。吉三は出家じやお七やらぬぞ。宛名に書しよし様は愚僧勿論吉祥寺。何と紛ひはあるまいと。眞顔つくつた争そいに。何れ誠と別兼て皆々興とぞ覺しける。武兵衛住持と睨付て。これ御坊女房狂ひと成るなら魚も定めて食るで有らふ。幸い道で求たる玉子とこれに持合す。お饗應と申さうと袖の内より取出し盃に打入て。お寺様玉子酒ひとつ参れとつきつける。何じや身共に是飲の。如何にもお七同前の八百屋の玉子。参る氣の参らぬ氣ので眞實の底と洗ふて見る合點。疑ひ深い男じやなふ。佛祖と懸てお七への戀は偽りなけれども。邪淫は思案の外の事殺生戒は得破るまい。イヤくくく何は佛祖と懸られても。是と飲やらにやいつ迄

も吉三が垢は扱られまい。ムすりや是非共に飲じや迄。おんでもない事さこし召せ。ハチ扱
くく是非もない。ケ實に昔しも例し有り。鳩の秤に身とのへし佛の慈悲の往古も。愚
僧が今も菩薩の行此酒即ち清淨地。吉三が垢さへ扱るなら。吞で見せうと引請て。手に持
そむる盃の朱と濺たる血眼に。涙はあられの如くにて。武兵衛余まり酷いぞや。久兵衛夫婦
は大切な娘に浮名立られし。其腹立に如何様な無理無躰も云ふ筈じやが。師旦の好意によ
しなにも取合せ有筈。難題云はる、お手前が胸の中に物が有る。探して見たい物なれど
も。法師の身なりや是非がない。拙僧既に父母の家と離れて七歳より。佛の前に受戒して
難行苦行師の呵責。誠に出家の文字の様。住家と定む宿もなく。雨露霜雪に身と痛め此處
に馴れば彼處へ行。或どさは餓に疲れ。立義文句に眼と晒し四十有余の此頃は。色衣と着
し敬いも一字の寺と司どり。上人ども云る、身に玉子酒と飲そふとは。身共が無間へ墮る
ならお手前は叫喚の苦と請ふのが不便なはい。と云ふて飲ずば聴れまい。いらんの林に交
れども赤桐檀の香は失す。泥より出て泥ならぬ胸の蓮は宗門の。七字の首題只今の妙法蓮
華と。一息にすつと乾さんとし給ふと。十内手と揚げ待たく待ませふぞや。待ふくと

盃とつて彼處へ投げ。吉三郎と取て伏せ。拳と振上げ遠慮なく。さんぐに打ければ。ヤア
家來の身にて推参なと一腰拔んとする處と。透間わらせず二ツ三ツ足の下お踏つけて。何
が推参緩急な。親の安森源次兵衛。見忘れたのと懐中より骨桶出して差上る。踏れながらに
吉三郎振仰向て。こは如何に親父様は死しやつたの。ナ、ヤク、問ふも語るも恨めしや。先
月廿九日の夜御切腹遊ばされた。忠義とは申ながら御無念な御最期の。其中にてもれつし
やるは。云置事は外にない何卒世倅吉三郎が。出家相續するやうお吳々十内頼むぞとて。
家來に御手と合されしお心ざしの尤愛さが。骨に徹つて有故にね主と敵いた天罰も。踏で
奈落へ沈むのも身共は何共思はぬと。其儘其處に轉け伏て男泣こそせつなけれ。吉三郎は
骨桶と手に載て見つ膝に置。そ、變り果たるお姿と咽入く消返る。十内頼て起直り骨桶と
弓手に持ち怒る顔も其様も。別れし親の物云にて。ヤ、世倅の吉三郎。源次兵衛が冥途のら
汝に尋ねる事どもと。云譯わらば返答せい。形は人に生れても恩と知らぬは畜生よ。恩に
も三ツの品がある。差當つては親の恩。身と立子孫と養育するお主の恩は猶重く。文字と
習ひ目と開く師匠の恩は取わけて。大海よりも又深し。譬と以て云ふ時は。親は子と憐れ

めどに主には見のへぬ事。主は家來と養なへと身に替て最負はせぬ。師匠の恩は目前お汝が不義にあらんと。四十余年戒行の譽れも名とも願みず。玉子酒と參るのど。のめくとして見て居る事。畜生と云はふの。腰拔者と云ふの。八逆罪の科人めよ。次に此の源次兵衛。假し勘當せし事。某し兼て若殿の御爲に死ぬる覺悟故。流浪させんも不便なり。亡らん跡も吊れたく。少しの事と云立に出家に成ぬ其内は對面せじと。此寺へ追ひ遣はせしは慈悲ならずや。其甲斐もなく今日明日と通世と延とよし。内々人の知らせし故末頼なき世忤めと。眞實の心に成て勘當はしたれども。自然法師になるならば。十内我に成のはり勘當も許してやれ。骨に成とも懐のしき顔に對面致させよと。頼みし手前も耻らしき非道なる性根にて。親の爲に奉公せう武士になるのが孝行とは。能もかのは吐したと。一度は怒り一度は又打萎れたる物腰に。それはと答ふ詞なく。身と知る雨やさめくと泣て俯伏居たりける。十内涙押拭ひ。親旦那の御異見が篤とお耳に留つたの。是のらは又十内め推參と願みず。一言申上ますと飛退り手とついで。申吉三様。善と惡とは北南足振替る迄の事。夫程の義は云ひでも。辨への有御發明殊に短慮な生質。家來の者に人中で踏れた事の無念なと。定めて遺恨に思すである。町人連の口先に家一軒と見込じやの。いや盗人のすつばのと云ひ散されて虚呂利つと。うぢついで居る人じやない。コレ徒と云ふ大病に勇も武略も振ましたの。昨日迄も今日迄も千石取の御一子と崇育てし此方とば。雑言せられし其時は。舌切裂て捨ふると刀の柄に二三度も。忍びに手とば懸たれど。いやく自分相應に。大事の娘と犯されて腹の立が道理じやと。のめく置て十内も腰拔になつたぞや。家來の耻は此方の耻。お前の耻は親御の耻此世で不孝仕足いで。又未來迄成るか。慾心でない云分ふ斷然と暇遣しやれ。とふじやく。サックとせわしなく。問詰られてうるくと覺へず其處へ睨に。か七は顔と振袖の下から手にて物云す。否にもわらず稻舟のねとも得こそ云れざる。十内二人が口なしの色にぞいでたまり兼。つらくと駈寄て。吉三様。とても此方の性根魂曇りと磨く此刀。某が手に懸て。我も冥途のお供して。父御の前で拙者めが一分立る御覺悟と。吃相變て見へければ上人中へ押隔り。主に諫は家來の役最前よりも宥免す。不甲斐ない此法師と末頼みなふ侮どりて。近頃過言聞悪し。出家にも佛にもなすべき我が深切は。先にのら目に見へぬと氣色變れば。十内も吉三もはつ

と感涙の頭と下て渴仰す。武兵衛や太左は何とやら小むづのしさに。密そりと立て行と。
 十内は後さまに襟髪と引摺み。引戻しかのれら最前粗旦那。横着者の非道のと何者にこの
 聞たるぞ。真直に白状せよ。改ては云ねども若殿様の御難義と。身に被りたる忠義とは一
 國に隠れない。出放題なる戯言と能もく吐出したな。討て捨たい奴なれと御出家成る、
 悦こびに。命斗りは助くると右左へ取て投。起んとすれば踏倒し逃る處と又蹴倒し。二十三
 十五六十腰も背骨も立兼て。ほうく逃て歸りしは心地よく又可笑けれ。久兵衛夫婦も氣
 味悪く徐々出る玄關口。戀に逆子と引立て母が諄言ねすり言。はて何とせよ最云やんな。
 生物類なら何にてみたばふて出は入まいに。魚屋ならねば蛤の。口の開たは是非ないと吐や
 きてこそ立歸る。

中の巻

やよ柳もとの梢の雪ならで。餅搗宿の梅とのみ。冬籠する大根も蕪も。千代の諸のづら。
 とさはのきはの標や。橙柑子榎搗栗毘布串柿商ひの。見世と其儘蓬菜の。八百屋萬づの神
 の餅御藏の鏡心雜煮の。あらんあたけ心見と爰へ取粉の引ちぎり。ちぎりはぐれて戀病

の。娘お七は奥の間に。春とも待す行く年と。惜むでもなし世の中は。無常と外へ見せ懸
 と。色とは誰もする品の願ひの玉と手に懸て。題目繰て居たりけり。中居の杉は差寄て。
 一年一度の餅搗に小忌々しい何ぞいの。親御様への意地張は。返つてお身の菱花瓣。移る
 い易き人心。先には忘れて御座るやら。最早坊様になつてやら。知れぬ相手に義理立の。
 損な事じやと諷むれば。聞へぬ事と云ふ人のな。心の變る變らぬは色品數多見盡して。濡
 の巧者の仇競べ。吉三様にも私身にも。戀の手習血に染し。起請の罪も有るぞのし。何し
 に仇に成べきと。しやくり上げたる顔形。愛らしく又優しくも。重ねて返す詞なく。有様
 云へばね道理と。最負目にさへ持涙漏て袂と濡しけり。臺所より親方は杉よくと尖聲。
 れのれは其處に何して居る。泣子も目あいて泣く物ぞ。殊には今日の餅搗が。年寄た久兵
 衛や婆が正月祝ふの。額火に遇て諸道具も足らぬなの。毎年。嘉例の通り搗餅に小
 米一升減じぬは。生先の有るれ七じやと。手に絆さるゝ親の慈悲。近所隣へ聞へては奢り
 な事と識るである。一門どもも笑ふである。其上に娘に迄拗強て貰ふは是非がない。搗は
 すと捨て置。頼て頼も仕廻じやげな男どもは暇かない。兩替町の蝶和殿針立の玄伯殿。ね

出成されと云ふて来いわた面倒なと喚われて。傘も足駄も取敢ず。髪さへ今日は結暇の。なの戸口より吐やいて。吹雪と凌ぐ前垂に。走り出たる軒の下。ふごも根せりも埋もれて雪重げなる簀笠に。ふせる里の子哀れやと云ひ捨て過る裾と引。顔差出すは吉三郎。ハット斗りに立戻り。こは浅間しき御有様如何なる事と。抱きつき人目も分す泣出す。吉三郎は押鎮め。何故ぞとは恨めしや色故身とば寢す事。いのなる高位高官の往古今も同じ事。百夜通ひし少將の雨夜の憂は知らねども。雪に身内は冷抜て顔見ぬ内に消る身と。泣音もいづれ弱氣なり。ま、御尤く此方も同じ憂思ひ。たつた今迄云ひ出して。二人が泣て居りました。幸ひ表に誰もない。徐りと其處と這入て潜と左へ五六間。行ばた部屋の様の下暫屈んで居やしやんせ。お使に往て戻たら。首尾見合せて雪よりも。積る事ども何方のらも。云ひつ云れつさせませう。必らずそうと叫やきて駈行戀の道橋や。渡りに舟の心地して。教へしまゝに這入て。土に此身と打任せ釘になりたる手足とば。君が肌で打つけて。寝もせぬ中に睦言の心巧ぞ敢果なけれ。斯る折節町の年寄彌三右衛門。相客誘ひ入来る久兵衛夫婦悦びて。コレハく何れも様。珍しのらぬ嬰應に却つて御苦勞懸ます。さあ〜奥へと手と

取ば彌三右衛門打笑ひ。いのにも參る上からは。奥へも屋根へも通らうが。次手ながら御夫婦へ願ひと云ふは武兵の事。組中と云ひ平生に兄弟よりも懇志中。俄に不中な様子とば聞て去とは氣の毒故。どふぞ挨拶致さうと最前武兵衛に云ふたれば。久兵衛さへ合點なら。身共に別義御座らぬと結構な返答に。今宵の祝儀と幸ひに跡のら是へ見ゆる筈。押つけがましい様なれど。萬事は我等が貰います。御夫婦頼むと云ければ。久兵衛居直りて。れ心遣ひと申さうのれ宿老殿のれ詞と。背くは慮外に候へども畏まつたと申されぬ。様子は定めし何れものれ耳へもはや入た筈。私類火の砌には飯櫃一つ得退すに。よう〜寺に匿はれ二度れ町へ立歸る。始末仕覺も無い時節彼武兵衛が尋ね来て。金貳百兩膝に置預けるでない遣るでもない。普請の用に立て遣る手廻し自由になる迄は。貳百年でも待金子手形取るにも及ばぬと。投出された嬉しさに。思慮分別もいらばこそ。忝いと戴いて初の如くそこ〜まで。斯様に普請致せし事。一門よりも深切な友達中と悦びしに。十四五日も以前の事それなる太左殿挨拶して。娘お七と所望と有る。夫婦の者は猶以て満足に存それど。いのなる事の娘めがふつ〜いやと云ひ放すに。親子ながらも此事は曲て曲らぬ道理

故其段返事致したる。明の日より金子とば。戻せくと五度三度毎日くたてせがみ。金子がなくばお七とば。呉れるの有無の返事と無昧至極の使立。いのに貧なる久兵衛とて賣買にする娘じやと。見立られたる無念さがどう堪忍がなる物と。聲打震い腹立る。彌三右衛門領きて。段々至極仕つた武兵衛のが不届じや。それや身共でも堪忍せぬ。然斯した事も有る沙汰に及んだ客番人。親の病氣に人參と盛ぬやうなる欲者が。貳百兩と云ふ金とば。手形もなしに預けたは。しんのら底のら息女とば欲しいと思ふ余りの事。賣買にせぬ證據には其節譯もいひださねば。侮づると云ふ物でもない。それにとや角意地張ば證文の無い金子故。待てとも云れぬ義理。とわつて折角普請した家と賣すも笑止なり。此入譯と篤くりと云ひ聞せたらお七にも。合點がなふて何としやう。ひらにくと物馴に云ひ廻されて夫婦の者。兎角の應答云ひ兼て差俯伏て居る處へ。武兵衛はしろりとした顔でつくと伸上り。何れもお待久しかる。横山殿逢ませぬ。小栗が今宵の參會に毒など盛て給はると。嵩に掛つた云分と勃とはすれど。是非もなき金に巻る、苦笑。乾の隅へいざくと伴ひ奥に入にける。お七は巨燧にうたゝ寝の夢何とやら壓はれて。ふつと起れば勝手に

三方土器束ね熨斗。母は銚子に蝶々の折すへつけて慌しげに。持行く奥の高笑ひ。合點の行ぬと見るうちに丁稚の彌作取看。手に持ながら差覗き。お七様嬉しい。いやの應のと有るとても。親と金には肩骨がなれもちつくりあやめたい。吉三様の聞しやつたら胸の火が燃るである。燃る次手にお前程火に縁の有るれ方はない。火事故寺で徒らし火事故今度の嫁入し。脾の臟強ひ男持ち雲雀の様にならんしよと。笑ひて走り行にけり。お七は覺へず聲と上げ。父様母様恨めしい。私が心にどの様な行れぬ義理が有る事やら。親子の中で問れずば人傳にでも聞もせず。死ぬると云やと云ひ放す。事と好しなされれた。娘と一人捨るの余りに惨い心やと。あつばと轉び泣聲が。漏て誘なふ様の下吉三は顔と差出せど。姿は流石隠れ簀隱笠なら抱ついて。聲とも立て泣たやと足摺してこそ居たりけり。母は奥より走り寄り。暫く泣て云ふやうは。合點の悪い娘やな。此身も一度は若盛り自身に花も遣て来て。惚た惚ぬのとも知り。器量の善いと悪いのは老の目にさへ見ゆる物。其方が皆光故否と云やると無理にどは。今日迄云はぬ兩親が惨いとは云れまい。世が世の時で有るならば。譬其方が合點でも彼な男と持さうの。器量發明揃ふたる聲と並べて見

ようため。分に過たる二十荷の箆筒長持るり数と。耻のしからず取揃へ。蚊屋は手織と忙がしき。中に自ら機あげて織調のへし物迄も。類火にあたと成たるは因果な男に焦付た。前生よりの奇縁じやと。思ひ諦め呉よのし。ならぬとならば此家と金の替りに突出して。出て行く分は構はぬが。親の難義と願す思ふ人には添れまい。よし添とて出家とば。引落したる罪科は閻魔の帳に付られて。火の車にて向へられ等活地獄の火の中へ。生ながら陥られて煙の下に其人と。戀し床しと叫ぶとも甲斐なきのみ夫迄。奈落の底へ墮そのが何心中になる物と。威しつ又は賺すにぞ。お七はあどなき心から涙の顔と振あげて。暫も君に添ならば此身は譬へ生ながら。火に入とて厭はぬが尤愛人がやうちんへ。沈むと有れば悲しやとあろくするに力と得。母は猶々口説立其方の返事次第にて。忽ち夫婦は袖乞の果は野の末山の奥。餓凍へて此世のら餓鬼道の苦と見するもの。たつた一ツの胸の内孝行な子は佛神の。憐みありて後々は願ひの様に成物ぞ。世間の掟は夫とば大事くと教れど。顔も心も悪てなる武兵衛に添は世界の義理。飽るゝ様に身と持なしや。何時去つてれこすとも忝けないと請取て。其時こそは打晴て好たれた人に添せてやる。親の難義に暫く

の勤めとすると思ふなら。吉三殿の目の前で帯紐解て寝るとても。徒らどは思やるまい。合點がいたらあいと云やあいと云やとて撫擦り。初心な心一ツにて胸の内が捌けまい。泪付杉が戻つたら母が無理の道理の。談合して返事しや。我身は奥へと立ながら心元なき親心。鉄剃刀櫛箱の中と探して持出る。ね七は更に夢現何の定めん中々に。消なば消ね玉の緒のゝれとだにも其人に。知らせて後に死たやと。障子一重と關の戸の。明れば頓て逢坂の道とも知らず泣盡す。吉三郎は羽拔鳥手も足もなき心地して。漸徐と蹂り出。涙と簀に押拭ひつくくと思案して。母のつとく云れしに一つとして無理はな。否とも應とも返答の無いは道理じや斷りじや。必らずく恨はせぬ嫁入するも我々が。薄き契も過去よりの定まり事と知らずして。浮々何しに來た事ぞ親の命又師の目とば。眩まのしたる天罰の忽ち當ると云ふ事と。今と云ふ今身に覺へた。あら勿躰なや懼ろしや。立歸つて明日は發心するぞふつくとそれが事とば思やんな。此方には忘れ果たるぞや。左は云へ今宵來たと云ふ。事ばつありは知らせたい。納め小顔がにしくと見たい事やと這寄て。障子覗けば我影の。若や勝手に見へんのと徐と退ては又立寄り。杉は何とて戻らぬと又さめ

くと歎きしが。是も又誤つた。お七にははや武兵衛とて親の許した男有り。目と盗むのは正真の間男も同前よ。叶はぬ事と諍々とよしない浮名濡衣の。重きが上の小夜衣何の簀笠いらぬとて。左や右に脱捨て涙の氷柱玉あられ袖と翳して出て行。斯とは如何で白雪の。道踏わける高足駄杉は心のわくせきと。行違ひたる取形も。縁の薄さに見紛いて内と覗けば夫婦とも。勝手に見へず能い首尾と願て立寄る椽の下。簀笠とつてこれは扱仲人は宵の程。最早祭が渡つたと。障子明ればやれ杉。悲しい事が出来たほど。袂に絶りて泣き出せば。イカニくろうである最う何は程曉あつた。ね脈見ようと洒落のゝる。ニ、面白そうに何ぞいの。戀しき人に逢ふ事の叶はぬ首尾に成た物。脈が能ふてもおかりや死る。死なせて給と迫上る。とどうやら柏子が違ふたが。まあ彼人に逢ふてのへ。ナニ彼人とは誰ぞいのすれやまだ御存ないそうな。吉三様に逢まして爰に御座れと教へたが。所に簀笠有りながらお姿は見へませぬ。人が見つけて往したる但し私と待兼て。歸り給ふか氣遣いなと其處よ此處よと尋ねれば。お七も共にうるくと。彼方此方と見廻せど。其甲斐も無き簀笠にひしくと抱き付暫し消入り歎きしが。稍あつて云やうは。いやく人が答たでも其方が

遅い故でもない。奥には今宵駕入のはや盃の取結び。母様最前爰へ来て様々の御異見と。否とも應とも得云ずに泣てばつあり居た故に。それが心に障つてがなふ歸り有つた物である。間のない事じや追付て呼まして来て給らぬ。是なふ頼むと手と合す杉は聞より似笑ひ。何がそふした事じやもの歸らしやれいで何とせう。親御で有ふが王様の勅諭にても否なれば。否と云ふのが戀の意氣。朝晩泣て御座つたは人目赫しの偽りよ。そうとは知らで此事と取持日あられた二人の。如何なる御苦勞遊ばすとも何國までも引添て。奉公しやうと思ふたは由なき案じ過しとした。私も一所に水臭い者と恨みで有ふ物。其中へは行れまい最今頃はお頭が丸うがな成てある。お前は明日のら笄鬘に結て嫁入の御稽古あれ。男は持ず切てまあ寝て花やろと立て行。冥途の坂の腰と押す詞と後は悔しけれ。お七は内の者に迄耻しめられて悄悄と。いの様私が悪のつた終否々と云ふたらば。お嬉しそうな顔と見て今頃は寝て語らうに。どう狼狽て泣ては居た傍のらさへも彼様に。愛想盡せば其身には嘸やお腹が立たたである。云譯しやうも詫やうにも最早お出は有まいし。文も届けて呉まいし頼も綱も切果た。あら懐のしや戀しやと。立て見居て見詠やり移り香残る簀と着て。笠も

被つて此様にしよんぼりとした形として。爰につま待水鳥の翼にあらぬ鏡笠は。仇の形見よ取も愛し脱も遣れぬ袖の雨。着て見ては泣き捨ては泣き。此處に歎けば座敷には三國一と云ひ離す。聲とは悪や穢らはしやそれ故にこそ相思ふ。中よかのれに引裂れた我が夫屍せ呼戻せ。左なくば寺へ連て行け出家ふとして生ながら。火へ陥つても大事ない。逢たい見たい行たいと。形も亂れ氣も亂れ。亂れ心のわどなくも家が焼たら寺へもき。又逢ふ事の有ふらと。ふつと注たる出来心徐り徐りと道寄りて。巨燧の埋火と四ツ五ツ簀に包み小袖にて。上と引巻うろくと振り上るや箱梯子。三惡道の通ひ道。二階は地獄の這入口。鬼が責來る身の因果。廻りくるくくるく車長持戸柵の上。此處の其處かと見廻して。ほいと投れば懸風に我より先へ煙ららん。

下の巻

罪科の掃溜所と牢と云ふ。文字は懸路の穴冠。繫ぐや牛のお七こそ今日火刑と。町々の役人夜番柴薪木。なげきと此處に持運ぶ。煙りは何れ變らねど。哀れはいと増りけり。母は今日さへ牢の食持手も撓く足弱く。道も涙に見へね共我手づのらに養焚せし。物と思はゞ暫らくも添心地して嬉しゐる。自のらとても此腕と手ふ觸たりと聞ならば。それとお七と懐抱へ達た心と樂みに。漸牢屋に辿りつき門はとくと音づれて。お七が食と云ひ入る。番の者の聲として。今日のお上の書付にお七が養ひ入ぬ筈。持て歸れと云ふ聲も。權威とらうに木で鼻と。扱る下部も所がら慄と身の毛も立戻る。向ふの方より久兵衛は歎きにのるい思ひ共。何れあやなし暫くも宿に一人は居られずと。踰限ひ來たる老いの杖。さ喚戻りやるの。ナント。お七は機嫌よう物も食ふたの饗だの。きふじやくと尋ねれば。サレバイン聞つしやれあの内でさへ義理仁義。振舞でもあつたやら今日はお食が戻つた。云ひも果ぬに久兵衛は我と忘れて大聲も。わつと叫びて伏轉ぶ。女房は取つきてけたましや何事ぞ。様子が早う聞きたいと継りせむるを遣るせなき。泣とて別の事じやない。可愛ひ奴と思ふのら思はず知らずの落涙ぞ。さわ往ましよとつゝめども。イエくこなたの詞の端。いゝにとしても氣遣ひな。隠すも事に寄物と手と取て引留れば。久兵衛包むに力なく。流石其方は女の身様子知らぬは尤もじや。総て牢舎と云ふものは。殺さるゝ日は大法で彼方よりも扶持が出る。お七が命も今日限り。あれ見や其處な柴薪。若木の花と生ながら烟となと

は胸慾と。立寄つて杖振上げ。叩いつ泣つうつなき。母は余り小興覺て泣も泣れずうろくくと。頑是もなしにした事となせお町衆は只管に。詫言として給はらぬ。代官様も丁筋のないは余まり胸慾や。頼と懸し日親様法華經の功力にて。焼たる鍋は空に飛お命恙なりしとや。夫婦の者が年月に袂の下で敷へたる。お題目の力にて若や焼すに返らうの。さもなの母は何しやうぞ。八才の龍女様兩車軸して。給給へ國土の内につ迄も。火と云ふ物の無のれりし世界の人の恨にも。母には罰が當るとも娘一人が助あらば。情なしとは思ふまじ。三年四年前よりも仲人が来て彼處此處と。似合の縁もありたれど。人手に置が氣遣いさに入舞とりていつ迄も。石小根繼の寵愛が過ての今の苦しみと。能見覺へて世の中の娘持たる親御達。譬へ如何なる徒らとも見返しにして置給へ。我身は懲ても悔みても。返らぬ事の淺間しやと。大地にどうと打伏して消る斗りに見へにける。久兵衛は差寄りて。道理じや去ながら。假初ならぬ科なれば。代官様の慈悲にも。町衆の詫言も叶はぬ事と始めより。諦めながら諄々と我も迷ふて朝晩に。法華の珠數と懸ながら愛宕様の方へ向き。娘が沈む火の難と。どふぞ救ふて給はれど。ほろくとは知りながら。頼みし事の耻

かしや子は三界の首楯とて。現世未來と取外す。悲しき老の仕廻やと。同じく傍小伏轉び聲と立てぞ泣にける。斯る所へ八歩ども柱のたげて口々に。何と不便に思はぬ。誠譬お云ふ通り花ならば初櫻。月ならば一匁どりの。饅頭のやうな手足とば。在所で團子焼やうに火に陥るのは惜い事。それに相手の若衆めは何としてけつゝつて。今日が日迄に尋ね來ぬ。因果はお七一人じやと。心なき身も哀れ知る目と擦てこそ通りけれ。夫婦は見上げ見おろして世おひがいたすな娘とば。彼柱へ縛つけ四方のら焼立て。阿鼻焦熱の苦みとまじくと見て居られうの。俱に灰ともなりたやな可愛の者やさりとては。火とつけずともどうぞ又。外に思案は出なんだの。欠落すると云ふすべと。杉は心も付ずして我から身とや焦とらん。年寄たりし我々が身は去年にも相果ば。斯る愛目は見まいもの。今は死なふも生けふにも。あるおあられぬ世界やと。足手震はし目くるめき性根なきこそ道理なれ。所へ年寄彌三右衛門涙片手に駈來り。悲う御座る尤じや。心一抔訴訟もするお上にもどうぞして。助けたら思しめし云譯の仕様とば。含めるやうに宣へども年のゆゑ悲しさは。吉三様お逢たさに火と放ましたと有様に。云放せば是非もなく。法の如くにお仕置と悔みても返

らぬ事。それに就ては武兵衛めが斯した中に取難て。二百兩の金子の義達て御訴訟申せし故。委細御詮議遊ばされ此事故に此度の科人も出来たりと殊の外の御悪しみ。只今牢へ打込れ右の金子は久兵衛へ。下さるゝとの御詮意じや。切てはそれと力にして歸らしやれいと引立れば。久兵衛は手と合せ金子お念は無けれども。娘と憂目に沈めたる元の起りの武兵衛めが。牢へ入たと聞たればいづれ力が付たやら。ちつと眼が見へますと悦こぶも又哀れなり。女房は聲とわけ此の吉三めはいゝなれば。お七が最期我々が歎きと余所に見づ知らず。尋ね來ぬこと恨めしけれ。行衛も知らぬ者迄も。口々云ふて譏るのが耳へ入ぬの聞へぬ。娘の敵嗣慾者。情け知らずと泣惑ふ。久兵衛は押鎖め。愚の事と云ふ人のな。お七が爲に正眞の敵と云ふは此方夫婦。學問立る家でもなし武士の一門持もせず。僅な八百や商ひして。娘がいたづらすればとて差て耻にも成ぬ事。お寺へ云ふて早速に吉三と娶に貰ふたら。今日の憂さは有まいに小家一軒立ふとて。否がる縁と結びし故惨い死とばさするとて。最期に親と恨めら物。千部萬部と讀たりとて此方夫婦が吊らひは。露程も受まいが。戀しと思ふ吉三殿一篇の題目も。草の蔭にて悦ばん。扱又此場へ見へぬのは猶

以ての情けぞや。ね七が吉三の顔と見ば心亂れて。戀に。臨終の迷ひとなり未來の程も不便なり。願ふた後生は無れども見物群聚の人々の。御回向の功德にて佛にもなれりと思ふも切て親の聞。味氣涙の諸聲に余所の袂も濡にけり。はや刻限と相見へて抜身の鎚のひらくと。朝日まばゆく輝けば夫婦は俱に叫び出し。人目も耻も誓固とも厭はず構はず駈出すと。彌三右衛門跡より取付て諫め賺してやうくと。歸るや夢の浮橋と娑婆と冥途のふた道に。盡ぬ名残の袖の露跡へ戻れを先へとて。引れぬ足の一夜だになく音や。是と

八百屋お七江戸櫻

呼子鳥。哀れなるのなね七こそ。戀路の闇のくらがり。よしなき事と仕出して。戀の罪科我ひとり。掻集めたる玉箒木。あこがれこがれ行末は。斯るうき身と此處彼處。見附くに晒されて。日本橋より引れ行見る人袖と絞る人。見歸る人も皆人も。柳原野のつく土筆。余所めに余る涙川。渡り兼ねたる丙馬。富士の煙と諸共に。消る命を敢果なけれ。首に懸たる玉の緒の。絶なば絶ね母さ々の記念の念珠線へへと。守りは父の賜はりし一部一卷後の世と。助け給へや南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經。いつしか君と馴なじみ。變るまいぞ

や變らじと。起請と書て取替し。小指と切て血と絞り。互いに語る陸言に去し御見の夜の雨。殿御待間の盤算。逢ふ夜あはぬ。恨みても。外に悪性はせい文と。他し男の他事や貧の盗に戀の歌三十字一文字のさみらひ。湯島にのけし松竹梅。本郷れ七としるし置。十一才の筆の跡。見し人あらば私の。紀念と思ひ一遍の。御回向願み奉ると。顔さし入る。懐ろの。内より漏るふり袖に。溜る涙をわはれなる。身は人くすと云ば云へ。笑は々笑へ一筋に。思ひ染たる戀なれば。譬へ此身と貫ぬられ。骨は粉となれ灰となれ。魂は此世にとまりて。蔭に附添身に移り。二世も三世も我夫と。手に手と取て蓮華のり。法の纒切れ果て。我と火に入夏の虫。こがれ死とは此事の。竹の子ゆへに迷ふ親。めふがも知らず恩知らず。如何にわらめと云へばとて。氣儘に心持なして。あられ少なさしめじとは。神も佛もしらす弓。三葉四葉のよめがはぎ。脛もあらはに三田の郷。亂れし髪と諸共に。隨喜の涙おちこちの。詠めは爰もにはの海。漣寄する品川や。濱に入江のあまど舟。見へつ隠れつ一霞。あれのらささと見渡せば。吉原雀くちくち。科の善悪ゆふしぐれ。戀の邪魔する男こそ。色の命と瀬田蜆。われは佛になりもよし。振もよしなや

や變らじと。起請と書て取替し。小指と切て血と絞り。互いに語る陸言に去し御見の夜の
 雨。殿御待間の盤算。逢ふ夜あはぬ。恨みても。外に悪性はせい文と。他し男の他
 事や貧の盜に戀の歌三十字一文字のさあらひ。湯島にのけし松竹梅。本郷七としるし
 置。十一才の筆の跡。見し人あらば私の。紀念と思ひ一遍の。御回向頼み奉ると。顔さ
 し入る。懐ろの。内より漏るふり袖に。溜る涙ぞあはれなる。身は人くすと云ば云へ。笑
 は。笑へ一筋に。思ひ染たる戀なれば。臂へ此身と貫ぬられ。骨は粉となれ灰となれ。魂
 は此世にとままりて。蔭に附添身に移り。二世も三世も我夫と。手に手を取て蓮華のり。
 法の。纜切れ果て。我と火に入夏の子。こがれ死とは此事の。竹の子ゆへに迷ふ親。めふ
 かも知らず恩知らず。如何にわのめと云へばとて。氣儘に心持なして。あられ少なきしめじ
 とは。神も佛もしらまじ。三葉四葉のよめがはぎ。腰もあらはに三田の郷。亂れし髪と
 諸共に。隨喜の涙ちちちの。詠めは爰もには海。逆寄する品川や。浪に入江の
 あまよ舟。見へつ隠れつ一霞。あれのらささと見渡せば。吉原逢くちくち。科の善悪ゆ
 ふしぐれ。戀の邪魔する男こそ。色の命と瀬田蜩。われは佛になりもよし。振もよしなや

。戀ゆへに命の時今暫し。暫とどむる人もなく。心も胸も慌しげに。もく道芝も露ぞ
 うぐ。ひく足並ののすつさて。爰を名にふる給の森。最期場にこそ着にけれ。斯る所へ吉
 三郎思ひ切たる白装束。群衆の中と押分け。人目も耻すつらくと。立寄んとしけれ
 ども。鞆固の武士に隔てられ。泣音斗りの問替し。我故斯る罪科は浅ましの有様や。此身
 も共にど焦れける。ふとは顔と振上げて愚に御座る吉三様。我心のらなす業と少しも悔ひ
 事ならず。逢ふて死ぬれば今のはや心に懸る事はなし。お前は命目出度し御出家なされ亡
 跡と。よくく吊て下さんせ。云ふ事とは是斗り。はやくお歸り遊ばせと名残に心亂
 るれど。人目と耻て漸よき詞の中に曇り行く。目元に哀れ残すらん。吉三も涙押隠し我身
 どのばふ心さし。悦はしやと振返り役人に手とついで。科の起りの本人は私にて御座候。
 急で彼とれ助け成れ我等とお仕置下されよと。遠て申せと役人は。愚や一度代官所で詮議
 極まる科人と我斗らひに叶はぬぞ。死なんす命と彼者が望の如く出家して。跡吊らいて得
 させよや急ぎ立去れ。それ科人時刻移ると下知すれば。吉三も今は力なく生て居られぬ我
 命。いでく冥途の道運に我先立て待べしと。腹一文字に掻切て露と消めく露の世や。お

七は今年十六才吉三郎は十八の。花や月雪郭公汝も冥途の友となる。戀に果して武藏野の。草の由縁と色深き淨名は諸國にひろがりて。語り傳へる末の代に哀れ盡せぬ物語り。

八百屋お七終

●近松時代物傑作淨瑠璃既刊書目

- | | | |
|---------------------|-------------------|---------------------|
| 一世 繼 會 我 | 一 雪女五枚羽子板 | 一 國 性 爺 合 戰 |
| 一出 世 景 清 | 一 傾 城 反 魂 香 | 一 日 本 振 袖 始 三 版 近 刊 |
| 一天 智 天 皇 | 一 遊 君 三 世 相 合 卷 近 | 一 會 我 會 稽 山 |
| 一十 二 段 | 一 碁 盤 太 平 記 日 出 版 | 一 傾 城 酒 香 童 子 |
| 一 最 明 寺 殿 百 人 上 臈 | 一 百 合 若 野 守 鏡 | 一 本 朝 三 國 誌 |
| 一 百 日 會 我 | 一 吉 野 都 女 楠 | 一 雙 生 隅 田 川 |
| 一 源 氏 烏 帽 子 折 合 卷 三 | 一 姫 山 姥 | 一 信 州 川 中 島 合 戰 |
| 一 蟬 丸 版 發 賣 | 一 天 神 記 | 一 關 八 州 繫 馬 |

●諸名家傑作戯曲小説類

太平記
大塔宮 曦 鏡

近松門左衛門添册
全一册 竹田出雲椽 松田和吉 合作
三版 定價金八錢
近刻 郵税金二錢

336948

心中二腹帯
末廣十二段

合巻 紀海音作

定價金八錢

郵税金二錢

「大坂東雲新聞」(上略)此作は全篇七段に分ち大塔宮皇室の衰頹と憂ひ替然身と誕して帝と輔佐し六波の奸悪と斬らんと圖り遂に逆八親王と誅するに至るまで字々悲愴宮が御涙の珠と聯ねし難より皮想作者の企て及女所にあらす

「國民の友」大塔宮院本近松門左衛門の著作と翻刻するも以て有名なる神田書局は竹田出雲の作 翻刻せり吾人は今世の文學者が此等の書と沙塵せんことと切望す

「改進新聞」大塔宮院本近松門左衛門の著作と翻刻するも以て有名なる神田書局は竹田出雲の作 翻刻せり吾人は今世の文學者が此等の書と沙塵せんことと切望す

一鳳等の著作に係る院本も出版せる由はて今回は竹田出雲の初作にて近松翁の添削と經たる大塔宮院本と發賣せり有名なる切子燈籠の齋藤太郎左衛門なれば面白しと云ふも既に費なり

「東京新報」九本翻刻の本家武藏屋は近松門左衛門の著作と大方は摺り終り是れより他の名人高手の作と發刊するよしにて今度は紀海音作心中二の腹帯及び末廣十二段の二種と合本として摺り出したる相も變らず製本美麗

新篇大和文範

第一册

定價金三十五錢

郵税金六錢

目錄●文新堂三好松浦合作御所櫻堀川夜討●近松半三作新版歌祭文●紀海音作御倉三代記●竹田出雲作勇進五雁金●錦文流作仁徳天皇萬年車●古淨瑠璃金平法問詩●改進新聞評 齋藤大和文範に比して撰擇の眼孔同日の論にあらす大才と抱懐して竊に大英界に萬世と弄したる戯作文壇の諸英雄是なり浮ばん本編所載(中略)六部となす就中三代記の如きは海音中の出作なるかな發行所は云々

一本編三世二河白道は土佐節中最も有名なるものなれども其作者の誰れなるやと知らず

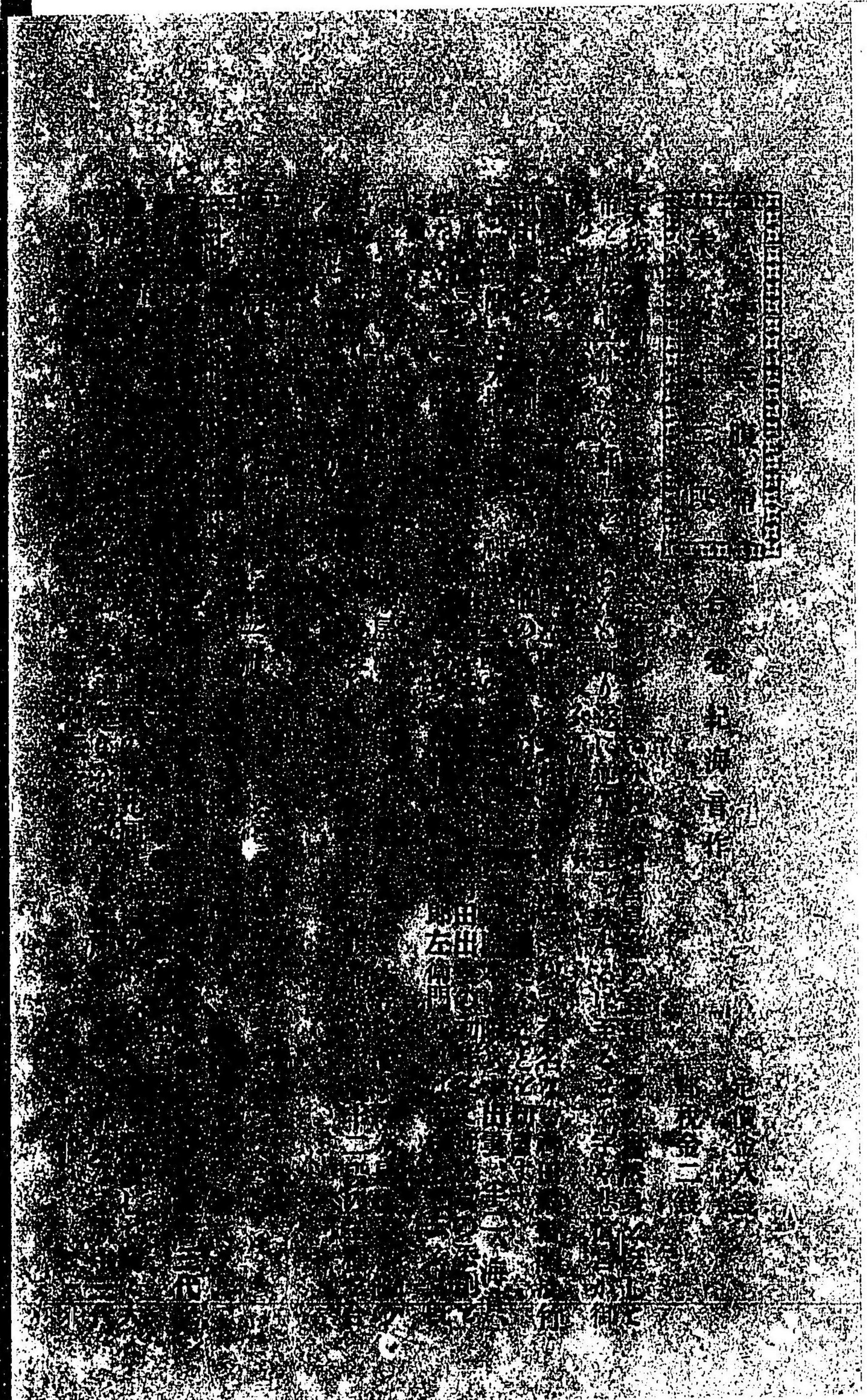
江湖諸彦幸に示教と垂れよ 津打治兵衛ナレ

一本篇三世二河白道は寶永五年(今より百八十六年前)土佐少椽章句に係はる刻本に依ると雖ども元來土佐節は寛文延寶の頃より江戸に盛んに行はれ寶永年中初めて大字章句附(寶永五年に板本)の書として出版せり其以前は細字書入本俗にしらみ本と稱する物なりしと傳ふれば寶永五年と以て著作年代とは認め難し初代柳亭翁淨瑠璃本藏書目錄中繪入本にて土佐節に行はれしもの和田酒盛寛文四年印本(今より二百三十年前)一心二河白道(櫻姫)延寶二年印本(今より二百二十年)とあると見ても其著作年代にあらざるを知るへし

一本書出版に際し偶道哲の開基に係る淺草聖天町西方寺の縁起と得たれば聊の參考の爲め左に抄出す

弘願山專稱院西方寺高尾墓略縁起

押當寺の開基順興道哲大徳は念佛三昧の大道心者なり(出生の郷里詳ならず)昔此地は非ある者を刑せられたる處にて枯骨野にみちみて心なき賤の男泣も哀れに恐しき處かなと魂を悼ましめ雨降る夜などは分けて物凄く往來の人も稀れなりとぞされを道哲大徳此地に草庵を結び彼の罪人滅罪生善拔苦與樂の爲に常念佛を發起せり(安中)二六時中稱名念佛忘りなく其後明曆三(丙申)年葛飾郡水所押上村大雲寺二世然譽上人を招待し開山として一字を建立す其則當寺開發の濫觴たり仰いで弘願山專稱院西方寺と號する所以を問ふに道哲大徳彌陀の弘願に乗じて専ら名號を稱し



一本編三世二河白道は土佐節中最も有名なるものなれども其作者の誰れなるやと知らず

江湖諸彦幸に示教と垂れよ 津打治兵衛ナドレ

一本篇三世二河白道は寶永五年(今より百八十六年前)土佐少椽章句に係はる刻本に依ると雖ども元來土佐節は寛文延寶の頃より江戸に盛んに行はれ寶永年中初めて大字章句附(寶永五年に板本六十二種有り)の書として出版せり其以前は細字書入本俗にしらみ本と稱する物なりしと傳ふれば寶永五年と以て著作年代とは認め難し初代柳亭翁淨瑠璃本藏書目錄中繪入本にて土佐節に行はれしもの和田酒盛寛文四年印本(今より二百三十年前)一心二河白道(櫻姫)延寶二年印本(今より二百二十年)とあると見ても其著作年代にあらざるを知るへし

一本書出版に際し偶道哲の開基に係る淺草聖天町西方寺の縁起と得たれば聊の参考の爲め左に抄出す

弘願山專稱院西方寺高尾墓略縁起

抑當寺の開基順聖道哲大徳は念佛三昧の大道心者なり(出生の郷里詳ならず)昔此地は罪ある者を刑せられたる處にて枯骨野にみちく(て心なき賤の男返扱も哀れに恐しを處かなど魂を悼らしめ雨降る夜などは分けて物凄く往來の人も稀れなりとぞ)されを道哲大徳此地に草庵を結び彼の罪人滅罪生善拔苦與樂の爲に常念佛を發起せられ(千時殿)二六時中稱名念佛忘りなく其後明曆三(丙申)年葛飾郡本所押上村大雲寺二世然譽上人を招待し開山として一字を建立す是則當寺開發の濫觴たり仰いで弘願山專稱院西方寺と號する所以を問ふに道哲大徳彌陀の弘願に乗じて専ら名號を稱し

西方往生の素懐を成就せる心なりと云々

一本尊 阿彌陀如来

(立像御丈三尺安阿彌の作道哲大徳持念の尊像)

一地 藏 菩薩

(銅佛立像一寸八分遊女高尾帯に身を離さず念じ奉りし尊像なれを俗に高尾襟掛地藏と云ふ)

一遺 哲 大徳の像

(自作)

一高尾所持羽子板

一同 鏡 壹 面

一袈 装 壹 衣

(高尾八潮の上着を袈装にして納めしなり)

寛文元年己七月

現住 然興林院

○高 尾 の 墓

(石面に地藏菩薩と紅葉とを彫付あり)

傳 譽 妙 身 信 女

万治三庚子年十二月廿五日

寒風にもろくもくつるもみぢかな

あまねく世に知る所の三浦屋の妓女高尾は寛永の末より享保の頃迄十一代ありしとなん分けて二代目の高尾名妓の聞へ高し世に万治高尾と云ふ常寺に葬る轉譽妙身北なり元下野國鹽原郡下鹽原磯庭村農民の女たり然して後いつの頃よりかやんごとなき何某の君此高尾の許へ遣ひ給ひしに高治三年の春の頃より高尾風邪の心地と打隊し彼君にも逢まいらせず彼君も又同年中秋より故ありて引籠り給ひ絶へて高尾か許へも遣ひ給はざりしが高尾が病日夜に彌増し既に死になんくとなす由聞し召しいと哀れなる事に思ひ給ひ高尾を屋形に運來るべき由家臣に命じ萬治三年十二月廿五日高尾遊里を離るゝと雖も無常の風ふせがたく此日本堤にて朝たの露と消へ失せけり

家傳秘密の奥旨は木下氏に傳て章句を世上に弘
是一流を翫ふ人まきらはしき節々にまどはど正
風なれと願ふものならし

寶永五戊子初秋上旬

土佐少椽橘 正 勝 印

此の竹藪は津打治兵衛の作なりし声曲敷草紙に「元祿の末よりいそせはもちげやナルし
三同白道の狂言始なり」と

近來土州の一曲は俗と離れ風とたて聲は梁の塵とたしめ節は利休の茶杓よりもしほらしく都鄙なべて風となとも亦樂しのらずや予も此道と數寄て今高德の太夫にちなみ章句と弘むる事數年は有身とたて名と發すは一藝の徳なり書は萬代の鏡二字の違百萬の誤と恐れ千度校合し百度琢磨して清濁と撰ぶも道と思ふが故なり然に頃日類板の塵芥街に滿或は筆跡紙數と減少し値の輕さと以てあやぶめんとす其書たると見れば節章の誤のぞふるにたらず依之愚が板行の正本には今改め印如斯印出之歟

小傳馬町三丁目

木下甚右衛門印

三世二河白道

第一

扱も其後。御存知の者。誰あると召るれば。太郎冠者惟光と。次郎冠者次重が。御前に畏る。御機嫌甚麗しく。我浮田の氏族とし。浮田の左金吾時世とて。人にも少々白川の。長者と呼ばれ家富て。万寶けんぞく何事も。心に任せぬ事もなく。弓馬は本より家の所作。文才詩哥糸竹も。拙のらざる器量にて。心に叶ふ妻もなく一人伏屋に杜鵬。鳴く一聲に明くる夜と。明のしめねたる床の内。少しは哀れと思ひなば。豫て申せし望みの色。やわ油断は有らじ。して如何に見たてつるのと有りければ。太郎冠者承り。大方ならぬ御望み。兩人心とつくしつゝ。随分尋ね候に共。中々及ぶ色もなし。幸ひかなや明日は。毎年祇園の祭禮なり。都鄙遠境の男女迄。集ひ集り候ふなり。見物ながら御出あり。御見立をしまさば。御心に叶へる色。なごの無ふては候はん。あゝ此義如何と伺へば。次郎冠者も一同に。是は妙き思案なり。寛活に出立ちて。然るべしと申上れば。元より色に淨

田の時世。笑盡に入て去とては。能こそ申せし次重と。末廣にて打叩き明けなば出ん。面々も支度致せと。それよりも奥と指てぞ入り給ふ。頃は皆月。中の四日の祇園の會。見物貴賤皆渡る。大路に埒結ひ棧敷搦へ。様々の打幕毛氈御簾几帳。風のままにくはのめかす。蘭麝の薰色女。いと心も浮田の左金吾。當世風の伊達羽織。ふるや寛活長刀。雪の顔面しゆすの髪。惟光次重御供の。下部の風も色めきて。弓手や右手の棧敷に尋ぬる色の品姿。有りや無しやと都の町。氣と附け通らせ給ひしと。垣間見たりし女皆。慕はぬ者こそ無りけれ。色はあやなや名につれし。錦の小路の中程に。女中の棧敷と打見へて。御簾掛け飾しめやのに。打見床しきさくめごと。風はのめらす隙もやと。暫し留まり左金吾は振仰向けば。上よりも差櫛一ッ落掛る。急ぎ取上げ見給ふに。さもぢんとやうなる籠甲と。磨き透してしほらしく。金銀珊瑚に飾りつゝ。哀れ世に心に叶ふ色もかな月と花とと共に詠めんと。さも美しき筆蒔繪。同じ思ひの歌摸様。此主心憎ふして。一向見まく欲ければ。詠め入てぞ在しける。内より優しき女の童。急ぎ立出で其御櫛。姫君様の御落し。此方へ賜はり候へと。いと小賢しく云ひければ。左金吾莞爾と打笑ひ。小女は知らずや櫛杯は落

せし主へ直々に。手づのら返す作法なり。人づてにては叶はじと。仰せければ棧敷より。又一様の女の童。急ぎ参りて其御方苦からず。御棧敷へ伴ひ申せと。姫御前の仰にて候へせ。御通りましますと。申上れば左金吾は。是は當座の戯ふれなり。上臈方の御棧敷へ。いのでの推参仕らん。此櫛御上げ候へと。差出し給ふ御手と引き。無体に棧敷へ伴へば。亭主も出て御供と。奥の一間へ請じける。姫君打笑み。苦のらす寛々と。見物まし〜候らへと。おはやのなりし百の媚。色好みの左金吾も。心動きてめられせず。詠めよれてぞたします。又姫君も男色の。ほのろに見しは中々に。物の數のは是こそは。年月願ふ色姿。殿ども見めと戀衣。しのぶの亂れ限りなく。人目の關と何とぞし。心と通さん計事。千々に案じて姫君は。井筒と云ひし名香と。一人こがる。芝船の。焚しめしつゝ。自らが。心ざしとて出さるゝ。金吾は君が言の葉の。面白く押戴り。六十二種の名香の。品々多き。其中に。井筒は如何にも聞く中に。案じあたりて古の懸比べたる振分髪。我ならずして誰の又。上ぐべきとは有難しと。連理と云へる名香と。忝けなさの印ぞと續せ給へば。姫君は暫らく聞し召れつゝ。是揚貴妃と玄宗の常に誓へる私語。君自が其中と連理の木とは

扱は戀。成就したりと人々は。悦び玉ふぞやとなき。時に姫の御乳人石部の藤内罷り出で。是に候姫こそは。誰袖と申しつゝ。禁中の上北面。齋藤左衛門義廣が獨姫。幼少にて父母に後れ。伯父兵衛尉養ひ立て。定房方に罷在る。某君と見申すに。浮田の左金吾時世公。兼々主君兵衛尉。望み申せし婿がねの。今日の祇園の引合せ。目出度き折に候へば。深き妹脊の御契約。御盃とくく。進め申せば左金吾は。是は幸ひ能き折のら。今日しも御目に掛る事。深き縁に候と悦び給ふは限りなし。すはや柳の見ゆるぞと。人立騒ぐに人々は。いざや諸共御簾下し。見物せんにそれくと。石部は表へ立出て。固めの役に畏まる。我もくと勇みつゝ。祭見ること面白き。爰に又泥の河部の片邊に。梶當麻のづらう勝廣とて。好色無道の悪浪人。家富み眷族數多持ち。裕のに暮し居たりしが。今日の祇園の祭禮に。見物の爲手の郎等。塵塚芥之介。浪次郎立飛。彼兩人と召連れて。美々しく出立ち大刀。小路一ぱい横たへて。喧嘩せんずる常詞。往來ふ者共恐れつゝ。中と明けてぞ通しける。錦の小路の棧敷の。誰袖姫と一目見て。色には猶も氣短者。御盃なりとも戴のんと。埒押破り入らんとす。亭主遽て、走り出。御覽の通り女中方。御用捨頼み奉る

と。手と擦て申しける。當麻怒つて。やあ其女中と一座が望み。已めと拳と握つてそつはうと。火の出る程打ければ。彼處へつばと打倒され。抱へ擦りて逃入りける。惟光次重つゝと出で。最前亭主が申せし如く。女中斗りの棧敷の内。我々とても青侍。各々方のお相手には。思ひもよらずひらさららに。他所へ御越候ひて。手お似合たる強者と。喧嘩と求め玉へのし。平にくと詫ければ。勝に乗て二人の者。長々しき口上は。さらりと止めてあの女中と。主君に一座と爲しむべし。些とも異儀に及びなば。頭微塵に踏碎くぞ。いのにくと力足。とらうくと踏鳴し。仁王立に立たるは。かつと嗚呼しくこそ見へにけれ。惟光次重心中に。可笑ながら其氣色。恐るゝ体にもてなして。力の強き御腕と。些我々も試んど。二人が腕と引搦み。實に強く腕やとて。二人一度に締ければ。さしも自慢の力腕。断るゝ斗り目も眩み。是れく許せ座興ぞと。涙ながらにわなくと。慄ひく詫ければ。惟光次重打笑ひ。計らふ様も有けれども。命は許すと差上げて。振廻しつゝ投出と。當麻怒つて大太刀抜き。討て掛れば飛掛る。町の者共棒提げ。只打殺せと散々に。一所に群り打立れば。轉び倒れて逃て行く。先祭禮の妨者は。事なく濟しぞ早々と。

目出度く神輿渡しつゝ。千秋樂の時津風。萬歳樂の見物は。面白りける次第とて。貴賤上下おしなべて。皆感せぬ者こそなかりけれ。

第二

其後。浮田の左金吾は。去る祇園の祭禮に。禁中の北面。齋藤兵衛尉定房の獨姪。誰袖姫に御縁し。互に願ひ千早ふる。神の結びの色姿。妹脊の川の橋ばしら。中立頼み縁があり。今日珍らしき花舞入。花やのなりし御装束。類ひななりし男色に。月と妬める姫君のまばもき迄に出立て。四邊も光り耀ける。金銀の蓬萊に。二人向ひて相生の。松に巢よくふ雛鶴や。汀の龜のさゝれ石。巖となりて苦のむと迄。千代に入千代と御壽き。兵衛尉も御機嫌よく。儀式終て御盃。さゝつさゝれつ舞ひ謠ふ。次郎冠者次重。悦び是にしらすとて。扇押取立上り。蓬萊山を飾る事。龜は本より萬代と。經るなれば長壽と祈る兆なり。松は其色常磐にて。とるへりの花も咲き。緑の影に寄る人は。老せぬ例候ふなり。竹は其蔭直にして。所々の節の間は。花杜鵑月雪の。節と違へず人も又。折に逢ふこそ目出たけれ。鶴は千歳保つゆへ。あゝるせいいたいせいちやうの。徳になづきて舞ひ遊び候と。

詞小花と咲のせつゝ。千秋樂と舞ひ納む。惟光も悦びて。面々も同音に。手拍子打て三國一と謠ひつゝ。悦びのめきたりけるは。目出たのりける次第なり。去程に當麻のづらう勝廣は。先日祇園の祭禮に。大きな不覺と取り。面目なくも立歸り。匂ひ床しき誰袖の。其面影の忘れず。明け暮れ戀に身と沈め。余り堪かね郎等の。芥之助浪次郎。兩人と招き寄せ。去し祇園の祭禮に。見初し女は音に聞く。齊藤が一人姫。誰袖姫にてありけるとや。何卒望み迎へ取り。妹脊の川の渡り初。深き契りと結ぶべし。汝等は此度契約の使として。兵衛が館へ立越よ。早疾々と申しける。浪二郎申すやう。さん候ふ君はしろし召れずや。誰袖の義は先達で。鐸のね契約定り。今日婚姻の壽なり。是は千曳の石にして。最早叶はぬ御事と。申しければ勝廣は。大きにせいて口惜や。なまなの戀路と思ひつゝ。人目と忍び包みしに。人に先とこされたり。此上においては。兵衛が館へ走せ入て。一家の者共切り散らし。誰袖姫と奪ひ取り。是非共に某が妻と定めん。者共よ早打立んと。ずんぞ立と芥之助。今暫しとて押止め。こは氣短なる御事ぞ。齋藤一家の奴原は。君の御手とおろされずと。某兩人馳せ向ひ。一々に踏みつぶし。姫と引立參らん事。何よりも

つて安けれど。爰に一ツの難儀あり。此度響と定めしは。先日祇園の祭りの場。我々に刃向ひし。浮川の左金吾時世なり。粗忽にしては怪我あらん。夜半の時分に見すまして。兵衛が館へ忍び入り。盗賊一揆の風情して。姫と引立参るべし。若も刃向ふ者あらば。其時こそは片端より。將基倒しに切散し。本望とげさせ申すべし。此儀如何にと申しける。づらう大きに悦喜して。いしくも申せし芥之助。是究竟の手段なり。然らば用意仕れ。早疾々どそれよりも。其夜の更ると待遠く。心せき屋の家鶏の。聲諸共に打立て。仇なる心は鳥羽玉の。錦の小路へ押寄する中に取ても芥之助。本より忍びの名人にて。大きな綱に熊手と結付。煉堀の棟瓦に打のけて。縄と傳ひて攀り。内の躰と見てあれば。人鎖まりて音もせず。仕済したりと飛びとりて。時分はよきぞ此門と。打破つてはや入れや。者共と云ふ聲に。表なる一揆の者共。心得たりと云ふ儘に。大槌鉞手々に持ち。我もくと打破り。矢聲とあけて切て入る。こは何事ぞと館の内。上と下へと返しける。され共物に心得し。左金吾惟光次重は。表とさして切て出。刃の光りと便りにて。爰と先とを戦ひける。齊藤兵衛定房は。老武者とは申せ共。心猛き人なれば。長刀引さげ松燈し。狼籍者余

さじと。宣ふ聲に。傍より。當麻のづから飛んで出。齊藤やらぬと打てる。心得たりと定房は。長刀と押取のべ。爰と先とを戦ひける。心は矢竹に逸れども。老武者と云ひ殊に又。血氣さのんの勝廣に。さんぐに切付られ。彼處へのつばと伏し給ふ。止めと刺んとする所と。左金吾は立歸り。はつと云ふて駆隔て。勝廣と戦ふ間に。次郎冠者浪二郎と。押並べて引組。あいやくと揉合ける。太郎冠者惟光は。芥之助が首取て立歸り。是れと見て勝廣と押取まさ。主従して切立る。づらうは太刀と請外し。眉間としたゝの切りつけられ。こは叶はじと逃行と。餘さじと追駆行く。次郎冠者は浪二郎と。彼處へのつばと取て投げ。やあ己等は何者ぞ。様子と申せと責ければ。眼も瞑む悲しさに。我々は當麻のづらう勝廣。主従にて御座候。斯様くの次第にて。今宵是迄押寄せたり。我とば助け給はれど。一々白状申ける。次重聞て。能こそ申せし褒美には。首とば助け腕骨と。あいやつと引抜き。彼處へのつばと投げ捨て。定房と見てあれば。はや事切れてましますば。果てぞ居たりける。斯る所へ左金吾惟光覺束なく立歸り。定房の御傷は如何にと宣へば。事切れ給ふと申しける。あゝ無念や舅は親。親の敵のづらうめと。金輪奈落の底までも。

追のけ討で有るべきや。誰袖とは二人の者。萬事頼むと云ひ捨て。行方知らず出給ふ。次郎驚きこは如何に。君は御出ましませば。何處迄も御供と。跡と暮ふて馳出ると。太郎押止め汝は跡に留まりて。姫君へ此事と。聞かせ申せよ御供は。某なりと駈出る。次郎聞て。いや御身は跡に留まりて。姫君兵衛の御事と善に言ひ給ふべし。我こそは御供と。太郎と彼處へ突のけて。御跡慕ふて出にけり。ある所へ姫君與より出給ひ。兵衛の死骸に抱きつき。暫し絶入り泣給ふ。惟光も泪と流し。君の御所存語りつゝ。敵と追のけ出給ふ。若も御怪我候ひては。某が分立ず。御跡慕ひ参るなり。敵と討て御本望。遂させ申し候はんと。出んとするや。姫君はなふ待給へ惟光。自が爲にこそ敵なれや。さりては。一所に伴ひ自にも。討せ給へや捨て。何となれと思ふぞや。情なしや悲しやと。聲と上げてぞ泣き給ふ。惟光も理に服し。實御理いざさらば。某御供申すべし。御心安く覺し召。左金吾様に追付て。諸共に敵當麻と。大地と割て討取ん。いざ御出と夫よりも。兵衛の死骸と片付て。姫君の御供し。甲斐くしくも武士の。矢竹心の一筋に。吾妻とさして下りける。彼の惟光が心の中と。貴賤上下としなべて。皆感せぬ者こそなりけれ。

第三

治る御代も久方の。月に名高き武藏野に。深草の色人の百夜はいまだ。あさぢがとる。其一節も吉原とて。皆人通ふ色里あり。三千の浮女の籬争ふ花々の。園生に植ても隠れなき。紅の葉に名とよせし。高尾の君と申せしは。二人ともなき三浦が内。今全盛の君なりき。然るに此女郎。たけはづむ迄深川の。浮世と云へる大臣に。馴染重ねてつまごめの。出雲八ゑがき云ひ合せ。外の客には強く出。下紐解ぬ中なりき。今日もゑにし契約にて。今やくと待居たり。爰に禊當麻のづらう勝廣は。都にて齊藤兵衛定房と。叶はぬ恨みに討てそて。當國に忍びしが。人に面と見知られじと。髪がつさうに大髯なで。大江のゆふがん鬼貫と。其名と改め伊達小袖。朱裏くはつと吹へさせ。身せば廣袖大刀。晝夜悪所に徘徊し。放逸無慚にふるまへば。恐れぬ者こそなりけれ。昨夜より居續けして。今日の歸りに高尾と見て。天晴曲輪の色司。お名の高尾は唐土迄。我我朝に知られたる。鬼貫と云ふ大臣が。度々御一座願へども。御障りのみ氣の毒の。ふのまの方へ無理所望。是さ高尾の紅葉がりと。後とはと、打ければ。高尾莞爾と打笑ひ。可笑き人の詞のな。千

日千夜通ふても。叶はぬ戀ぞ其方に。紅葉狩と出ぬれば。此方に少しも騒がざる。世様と云へる惟茂あり。刺通されな鬼つらよ。かいてたもとと振切れば。流石の鬼貫詞なく。きついで君やとうれよりも。馴染の藤屋へ急ぎける。爰に浮田の左金吾は。敵と尋ね吾妻へ下り。人目と忍び深川の。縁の屋敷に假に居て。浮世之助と名と變。不斗此里へ通ひ來て。高尾の君に馴衣の。留木の匂りなつゝのしく。朝夕通ひ給ひしが。次重と御供にて。勇む心も早小舟。濡にうつりし舟男。板踏ならし聲のけて。おせさつくと色里へ。飛ぶが如くにこがれ行く。斯て彼の地になりぬれば。身振繕らふ衣紋坂。人待女郎數々の。中に位も高尾の君。互にそれと三瀬川。殊脊に同じ戀衣。ささんし給ふの待遠のと。互に袖と引つれて。伴ひ内にぞ入り給ふ。揚屋立出。御盃と取々に。一座賑しめてなして。興と催す酒盛は。面白ふこそ見ぬにけれ。あゝる所にさも美しき作り花。花籠に挿亂し大勢にて身出て。文と高尾に参らざる。取上て見る所に。其頃曲輪の強者にて。鬼貫と深く逢ふ。坂田と云へる女郎より。絶し縁となつゝのしむ。筆に心と盡しつゝ。今日に馴染の御出に。深き方より送られて。眺めあゝる花ながら。色とも香とも知る人に。見せ参らせたく候ひて。暮に及び候へども。送り参らせ候ふなり。こじんに習ひ燭と取り。御眺め候はば。悦び増さんしとどむ。高尾は思ひよりざりし。人の情の花の色。眺め飽ざるのへり事。心と盡し書送り。傍の床に直させて。是と肴にお一ツと。水と漏らさぬ花の宴酒酣に面白や。時に浮世定りの。あだ酒盛は事ふるし。此花につき一景の。あらまはしやと宣へば。高尾げにも御理。いざ打寄りて女郎達。牡丹の花にとよせて。豫て仕組し獅子の曲。宜しうらんと有りければ。はや疾々と浮き立て。小薩摩八橋それくは。色大よせの遊興は。面白ふこそ見ぬにけれ。愛と忘るる色里の。五町の君の數々に。皆人憧れ伏見町。引手あまたの梓弓。君が心の二丁目の。匂ひゆあしき八重梅に。暫し浮れてたゞ角町の。戀と恨みの堺町。右の方おは賑ひの。外おはわらぬ江戸町や。情に名とや揚屋町。類ひあらざる新町の。一座賑はふ京町に。歸るさ忘る袋町。大格子小格子に。源氏格子や揚屋茶屋。色と粧はふ雅欄は。心もうはの空煙に。思ひと焦す風情なり。先青陽の雪解初て。綻び出し梅の花。縫てう鳥の初音の君。聲もあはるは花輪違。一ツ櫻や三ツ櫻。櫻木彌生の色の紋。つゞら花笠紐もるけきは。初元結の小紫。こがれこがる、花袋。心も波に浮橋や。若紫は

藤巴緑の眉も若松の。羽と交して抱蝶は。千歳萬世も變らじと。馴染交せし夏木立。花澤
瀉は世の人の。縁とひくる郭公。聲もたのまの葛城や。めした姿の色深き。紅葉は其名高
尾の君。違柏や三ツ木瓜。千里津島の外迄も。類あらざる君達なり。冬とや云はんはつれ
雪。積る思ひは高松や。三階松の御盛んに。變らぬ色の常盤の君。其外巴四ツ目結。結ぶ
縁しの浅妻や。わけて小よしの靡き桐。山と繪に書く檜扇や。八重角をみさきり八花形。と
んと蹴あげし鞠はさみ。影や日向の取々に。通ひくるわの全盛に。浮れさまよふ有様は。
實面白き次第なり。色よき素縫つばとりて。下小は殊に優れつ。縫ふてう糸のふしのみ
も。忍ぶもじずり誰故に。牝獅子牡獅子とつづきつ。浮れて出る取姿は。面白く又拍子
とる。笠と召せくまん丸よふて若よふて。華美な締緒の片結び。締てきりりんさきりく
と。皆一樣の取姿は。水に繪と書く其風情白さと見れば月の色。實にしんくとみあれや
ま。神の神籬物わびて。誰と待やら呼子鳥。いやしほりゆく我袖は。槎つ纏れつ纏れつ槎
つ。来て見よのしの踊り振。戀慕の笛み寄る獅子の。千鳥足なる花の聲。夢と破るや飛鳥
の舞。身と縮めつ毛と慄ひ。亂れられる糸竹の。翔る小蝶に勇みくつて。廻れば廻る

車とび。亂れ拍子になる鈴の。秘曲につる面白や。獅子とらでんの舞樂のみさん。大き
んりさんの獅子頭。打てや囃せや牡丹ぼう。彼石橋も斯やらん。追廻り毛とふるひ。牙
と鳴して爪とどぎ。花に這ひ枝に臥し。狂ひし躰と其儘に。樂にうつして獅子とらでん。
いさや名残の拍子と。世々もつきせし松の葉の。散り失せずして常盤木の。千世萬代の
壽と。奏て舞とぞ納めける。人々是に興となし。いさ夜も更ぬ暫しばも。さわ御床と氣と
つけて。世之助高尾諸共に。一ツ床にぞ臥し給ふ。實に生憎や月に雲。花に嵐や世之助の
下部来て。都より急の御用の御飛脚。急ぎ御歸りましませと。大息ついでぞ申しける。宿
屋の者共是と聞き。次重に斯と云ふ。次郎はやがて奥に行き。其趣きと述べれば。浮世心
元なくて。計らぬさはり是非もなし。今日に限らぬ縁なり。近の御見ときぬくの。袖引
分けて出給へば。高尾いつより睦まじく。苦しうらざる御首尾なら。夜明けてお歸りまし
ませのし。心元なふ覺ゆると。止め申せば浮世之助。次重が供すれば。危き事はなき間。
心安のれ重ねてと。ひかふる袂と振り切て。心強くも歸らる。是と限りの縁とは。後に
ぞ思ひ知られたり。高尾は一人忙然と。御跡見送り立居たり。仕済したりと鬼貫は。伴の

牡丹の花の瀬。踏破つて立出。眞に仕込し刀とさし。高尾が傍に立寄れば高尾驚き。逃んとすると抱きとめ。情なき君や斯迄も。心と盡と某は。云はずと見知り給ふべし。心に随ひ給ひなば。おそろくは此家に。山吹の花咲かせ。根引に館へ移しつゝ。變らぬ中は姫小松。千代とこめつ、諸白髪。頂く迄も君と我。しつばと語り申とべし。斯面こそ怖くとも心は優しき我なるぞ。如何に〜と口説ける。高尾大きにせき上り。彼處へうつばと突倒し。流れつたなき川竹とて。勸り給ふの女郎も。女郎によりての事。浮世様と命とかけ。夫婦の契約なしぬれば。如何程に宣ふとも。心と亂す我ならずと。耻しめて申しける。鬼貫聞て腹とたて。ゑゑ、推參なり傾城。色なればこそ斯程迄。心と盡し鬼や斯と。云へば云え程勝に乗る。此上は是非共に。力づくにて靡かせん。さあ返答は如何に〜と。理不盡に抱きつく。高尾今は堪へぬ。鬼貫が指たりし。刀と引抜き打てかゝる。鬼貫はと逃廻る。高尾卑怯や餘さじと。追詰られて詮方なく。一太刀打せつゝと入り。刀と奪ひ取て伏せ。扱大膽なる女めや。さあ刺殺すが如何にと云ふ。狼籍者と聲立る。鬼貫人に知られじと。無慚や高尾が心元。二刀に刺殺し。人立騒ぐに紛れ出。行方知らず逃伸ける。揚

屋の一家驚きて。高尾と切たぞそれ〜と。曲輪一同騒ぎ立。上と下へと返しける。皆々立よりやがて。高尾と抱き上げ。心地は如何何者の。斯はなせしど如何にやと。様々に問ひけれど。はや事切れて見ぬければ。涙ながらに盛りの花。思ひと焦と橋場村。戀の煙となしにけり。誠に不憫の次第やと。貴賤上下としなべて。皆惜まぬ者こそなりけれ。

第四

旅の衣は篠掛のすゝがけの。露けき袖や絞るらん。太郎冠者が申す様。爰は名にあふ武藏の國。都に勝る花の江戸。敵當麻も此所に罷り在と承はる。左金吾様も巡り逢ふ。便ふ神社佛閣や。名所舊跡御眺め。愛さ旅忘れませと。案内の爲に先に立。あれ御覽せよ名所の。花より先に咲く梅の。湯島神田の御社より。下谷遙のに見下るせば。東の御堂棟高く。雲井に見ゆる大音寺。拜み巡りて車坂。花の嵐といとへとて。其名もよしや屏風坂。盛りの春は吉野にも。勝る上野の眺めな。利益も高き山王や。貴賤群聚の風俗の。華美な姿や一文字。色のあゝ笠伊達染の。模様品々しなし帯。濡た姿の優しくも。深く人目と忍ぶの岡。又不忍の御神は。結ぶの神と聞くのらふ。別れし人に今一度。巡り逢せて給は

れど。祈誓きせちなしつゝ行末ゆくすゑの。尋る君ぞ小石川。旅の勞つかれは牛天神。暫しばし休やすらひ頼たのみて。名に大久保の柏木かしはぎの。ゑもん櫻も春ならで。立隔たちへだて行く霞が關。思おもひは絶たぬ玉川の。灘の流の糸打いととけて。解とけて亂みだれていつら青山。夫故つまに心と盡つくと金王こんわうの。其舊跡ふるせきも跡になし。鳥羽にはあらぬ高繩手たかなばて。海面うみづら遠く詠ながむれば。釣つりする小舟。雲間くもにならぬ帆掛船はかけ。宛まがら須磨すまや明石瀨あかた。朝霧あさぎりわけて便船びんせんし。向むかふに霞かすむ安房上総あづま。遠見とほるうち小漕こがねども。西門にしもん跡あとにつく田島。三ツまた分わくる瀬せとはやみ。露つゆにきらめく椎いの木は。幾世いくせい経へぬらん石原いしはらや。戀こしき人と待乳山まちちやま。二丁ふたぢやうの小舟こぶね名なにしあふ。押おせやれ男。浮うた浪なみとや花川戸はながわ。爰こゝ淺草せんそうの觀世音くわんせいおん。三社さんしや權現ごんげん明王院めいおういん。朝露あさつゆ結むすぶ庵いほが崎。日本堤にっぽんづつみのはるくくと。金杉かなすぎ千壽せんじゆ詠よめやり。橋場はしばの方かたへぞ歸かへらるゝ。見ればふりたる寺院いぢやういんあり。傍邊かたへに紅葉もみぢ色いろつきて。夕日ゆふひ小染こぞめむる紅べには。二月の花も霧島きりしまも。及およぶべきとは見みぬざりけり。其元もとに石塔いしだたて。四十よじ手てりの僧そう一人。鉦打かねうち鳴なし聲こゑ哀あはれに。念佛ねんぶつ申まをして居ゐたりけり。如何いか様さまは故ゆあらんと。立寄たてより衣ころもの袖そでと引き。我々われらは此地こゝ始めて。一見いちけんの者ものなるが。未いまだ時ときより色いろづきて。あゝる紅葉もみぢは珍めづらしく。殊なほに亡世なほの標しるしと見みゆ。いはれと語り御聞ごきこらせ。候まちぬらしと仰おほせける。僧そう聞きて此塚こゝには。哀あはれなる物

語かた。語りて聞きせ申まをせし。此こさういんは正覺院せうかくいんと申まをすなり。是こゝなる紅葉もみぢは色里いろに。其名なも世上じやうじやうに高尾たかおとて。皆みな人ひとなづむ君きみなりき。中なかに馴染なじみも深川ふかがわに。都方みやこかたの人ひとなりとや。浮世うきよとのやに身みと任せ。外ほかの客きやくとば振りつけて。逢あはずの森もりの葛くわの葉はの。恨うらみと含くみし物ものならん。去年七月末こゝろしちがつすえの頃ころ。聞きはあやなし敢あなくも。害がいし立退たちひき候まちふなり。歎なげくに甲斐かいなく死體したいと。此所こゝに葬はなひりて。御覽ごらんの如ごとく戒名かいみょうは轉譽てんよ妙身めうしんと申まをすなり。常とこに紅葉もみぢと好このみつゝ。紋いにも染ぞめて其名なさへ。高尾たかおと附つし君きみなれば。印しるしに是こゝと植う候まちふ。色いろある君きみが印しるしにや。紅葉もみぢも類たぐひあらざれば。世よの人ひとなべて吾妻あづまなる。高尾たかおの紅葉もみぢと申まをすゝ。名木なぎにて御座候ござま。拙僧せつそうも彼かの里さとの。邊へりに近ちかき庵室あんしつに。名なは道哲みちてつと申まをすゝ。此君こゝのときときの僧そう。悼いたはしく存ぞんつゝ。毎度まいど参まゐりて回向くわうとなす。見れば何なにれも三衣さんいの身み。御結縁ごけつえんに打寄うちよりて。回向くわうましく候まちへと。委くく語かたれば誰袖たかそでは都みやこと云いふに心こゝろつき。扱あはれなる事こと共ともや。其高尾たかおに逢あひ給たまふ。深川ふかがわの浮世うきよとは如何いかなる方に候まちらひし。愚僧ぐそう密ひそに承うかる。都みやこにては浮田うきだの左金吾さきんご。今いま此吾妻あづまに御下ごくだり。御名ごなと隠かくさせ給たまひつゝ。浮世うきよ之助のすけとは申まをせしとや。姫君ひめきみ扱あはと嬉うれしくて。其浮世うきよ之助のすけこそは。妾めかけが尋たづぬる夫つまの事こと。不思議ふしぎの人ひとに逢あひ参まゐらせ。夫つまの行衛ゆくゑと知る事ことも。偏ひとに神かみの引合ひきあせと。悦よろこび涙なみだはせさ

あへず。道哲は心得ず。見れば男子の姿にて。浮世之介と夫とは。争の仰ありけるぞ。さればにて候。其浮世殿こそは都にて。浮田の左金吾時世とて。妾が二世と兼たる夫。申すもいふに耻らしの。もりてや人に知られんと。廻國修行の姿となり。巡り逢はんと思ひこめ。今武藏野の糸世。亂れて又も逢ふ事の。便と聞て嬉しさは。覺し召しても御覽せよと。装束と脱捨て。委しく仰ありければ。道哲はたと手と打て。扱々いとしき御心底。然らば拙僧御供し深川へ参りつゝ。對面なさせ申とべし。假初ながら是どても。他生の縁とや申とべき。假初の愛節の。一夜妻とは申せども。高尾も偏に彼の方とば。偽りならず最惜み。申せし人の慕所なれば。一ぺんの念佛とも。御回向あれと申ける。姫君もいざさらばと。一所に寄て南無幽靈。成等正覺頓生菩提。鉦鼓の音も澄渡り。名もなつらしみ宮戸川。都鳥も聲添て。南無阿彌陀佛彌陀はとけ彌陀佛と。淺茅の原のさうくと。風冷の身にぞしむ。不思議や紅葉ののけるひて。塚の後にすごとくと。高尾が姿立顯はれ。あら有難の御追善申したき事候ひて。閻王に暇と乞ひ。是迄顯はれ候ふなり。されば遊女は事馴れて。人の心に包む色。詞の外に通るぞらし。其御方には浮世様。妹脊の契約候ひし。

誰袖姫にてましますかや。耻のしながら川竹の。流れの身とて自も。ふと此君に逢ひそめ川。深き馴染に身と沈め。此世のらさへ怖ろしき。鬼貫と云ふ悪性の。愛き恨みに悲しくも。刃にのり空しくなる。苦しき此身の有様と。浮世様御傳へ。亡跡吊てたび給へ。さなきだに女の身の。五障三じうの。重きさはりにさよ衣。我夫ならぬ重ね夫。愛節繁さ流れとたて。形と粧ひ色ありし。詞の露に濡衣の。人に思ひと掛たりし。報ひの實は隙もなく。はや時來ぬと云ふ聲も。慄ひわななき。風烈しく身に染渡り。東西暗く有つる所忽ちに。廣荒たりし野邊となり。鳴神震動稻光。凄じのりける次第なり。無慚や高尾は。世の人の。思ひとかけし泪の雨。うち時雨つゝ降りあれば。肌へに紅蓮の氷としみ。堪かね木影へ立寄れば。刃の賣木々の枝。劔となつて此身と裂く。血お染まりて立迷へは。鉄の牙ある犬。凄じき聲とわけ。牙と鳴して飛びあゝる。こは悲しやと杖と上げ。打てどもく煩惱の。責ぐる犬お詮方なく。逃んどすれば左右より。吞捨たりし酒の波。人よ焼たる火炎は又。猛火となつて打かけく僅なる。父母兄弟の爲あうる。身の善根の細道へ。轉びまらびて逃げ行くと。仇お誓ひし摺紙の鳥。鉄の嘴と鳴し。眼と振んと飛來る。

前後左右より責められて詮方なくて伏せ所と。群り寄りて引裂き喰ふ。道哲騒がず合掌し。南無や朝日の彌陀如來と。名號賣のけ唱ふれば。有難や紫雲お乗り。光りと放つて立ち給ふ。其時高尾は手と合せ。南無阿彌陀佛と唱ふる聲の下よりも。彌陀の利劔に惡業の。皆悉く恐れ去り。高尾もはつと影消て。地獄と見へしは忽ちふ。彌陀の誓ひの有難き。正覺院となりふけり。人々奇異の思ひとなし。念佛申しそれよりも。浮世之助へと急る。天晴不思議の事どもやと。貴賤上下おしなべて。皆感せぬ者こそなりのりけれ。

第五

其後夏立て。はや秋來ぬと文月や。今宵は名にぬふ七夕の。妹春と渡す天の川。稀の縁と思へども。人界の五十年。天上は一日おて一千歳と保つとのや。斯く限りなき契りさへ。哀れと思ふ世の中に。我は果敢なや交したる。誰袖姫おは引分れ。又馴初る紅葉なく。獨こがる。捨小舟。蘆の丸屋ののけ作り。琴酒軒と額と打ち。酒お憂き日と送るとば。哀と思へ小ぼうしと。酌とどらせて一ツ呑し。七夕と打詠め。死せし高尾は是非もなし。移香分くる誰袖に。逢せてたべと打歎き。暫しは爰に思ひ寝の。戀しき夢と結ばる。斯る所に

不思議やな。邊に茂む蘆の間お。星一ツさつと落つ。怪しやと見給ふに。異香薫じて風をよぎ。さも美しき天乙女。蘆間と分けて梶の葉お。五色の巻筆棹差出で。浮世之助お打向ひ。自らは織女より御使お参りたり。君は是れ牽牛星。色道と世の人に。示させ玉はん爲として。異國おてはるんと生れ。我が朝にては光る君。在原の中將。今又美男類なき。浮世之助と代々顯れ。男女の分の品定め。今宵ぞ満る天津空。定る寄瀬なる間。御迎お参りしと。申しければ浮世之助。思ひ寄ざる御迎ひ。假令ば過去はそう天の。牽牛星の精とても。斯く人界お隔つる身の。いゝでか天上なるべきと。仰せければ天乙女。此梶の葉お御召おれ。自ら御供申さんと。勸むる心お乗移れば。乙女は忽ち頻伽となり。梶の葉ともお戴きて。天上とるこそ不思議なれ。下界と離れて雲の浪。霧の間分けて良遙のお。上ると思へば浮世之介。昔お心立歸り。こは古里お近付くと悦び給へば。牽牛と交變るぞ不思議なる。それ天上と申せしは。此界より八万由旬。須彌山の頂上と。物利天と申しつ。帝釋の喜見城。三十三天段々に限りも知れぬ雲の上。其半腹に四王天。四天の在す都にて日月爰と御廻り。青海原は星の天。北辰諸星のわうとして。是に向ふてでんとなま。中お

も分けて七夕は。銀河の中に隔てつゝ。妹背向ふてでんがくあり。白銀の築地と築ち。黄金の樓門峰輝やき。牽牛の御方には靈香閣と額と打ち。織女の方方は天祥殿と額と掛く。百官卿相出向へば。牽牛は久しやと。一禮有て寵愛の。縞子より黒き御牛に。金の鼻つら紅の。打緒と取て悠々と。七寶の御床に直らせ給へば。何れも皆渴仰なしてぞ悦びける。其時に天乙女。織姫の御方。嘸待遠に在すらん。夜もいたく更ぬ間に。御入有つて打絶し。縁と急ぎませと。勇め立つゝ先に立ち。夜光のあり差上げて。天の河邊に出で給ふ。見渡せば天の河浪涼しくて。珊瑚水晶種々の。岩組多き隙々。珊瑚の枝の生茂り。五色彩るしな鳥の。音と争ひて囀るは。音楽するのと疑はれ。心耳と澄す川水。誰が爪音とは白波に。琴の音幽るに聞へけり。七夕はイみて。是れは何處の調ぞや。乙女穿爾と打笑ひ。君待兼て織姫の。遊ばすなりと申しける。七夕は聞し召し。こは偽りや左もあらば。夫迎へ舟いのみして。稀の寄瀬に遅きやと仰せければ。こは早く忘れさせ給ひけり。其年毎に品替て。紅葉の橋や笹小舟。今宵は鳥鵲なりけるが。いのに遅きと更る夜と。恨みて立し川波に。一度にさつと群來つゝ。翼と交し一筋に。橋と渡せば牽牛は。向ふ

へ渡り給ひし。打并びたる。鵲は雲井遙のに飛去りぬ。織女のみわやになりし。ば。御前の天乙女。百味のちんに漿の酒。さまざま。饗應奉る。織女盃御取上げ。捧げ給へば牽牛は。御盃と取上げて。こは珍しや逢ふ事も。玉の盃相替らず。契りも深き。鴛鴦の。相壽となすべきに。いざ此方へと顔と寄せ。一ツに結ぶ相盃。浦山さるは無りけり。織女牽牛へ打向ひ。君下界へ御越有り。凡人と御契り心替らせ給ひては。天上界へ又二度。上らせ給ふ事難しと。妹ふ女と誰補姫。じゆん女と高尾と云ふ遊女に。下して色と防せたり。御目に掛んと御傍の。天津乙女に仰有り。則ち兩女と御召有る。ふ女じゆん女來らるゝと。見れば不思議やこはいのに。二世と契りし誰袖姫。馴染も深き高尾なり。こはそも夢の懐しやと。互に左右へ取付て暫し涙に咽ばるゝ。時にじゆん女置すも。ふと馴初て紅葉葉の。飽ぬ別れに露の身も。消る斗り候ひしに。御目に懸るは優曇華の。織姫様には年毎の。其文月の便有り。今宵の寄瀬は自らおまげてお許したび給へと。涙にくれてぞ歎たる。ふ女は内に妬む色。外に顯れなふ順女。我は始めの磯馴松。君に纏はる藤の色。由縁の身とて絶り付く。順女はよしや織女の。御不興は蒙るとも。今宵は妾と敷妙の。袖と交

して給はれりし。いざ諸共お寢亂れて。結ばふれんと牽牛の。御手と取て立ちければ。ふぢよも取付きこはいのふと。放ち遣じと引留め。左右に取り付き引合ひて。情と争ひ給ふふぞ。牽牛今は詮方なく思ひは二ツ身は一ツ。何れと云はん様もなし。圍碁と争ひ勝ちたる方。手枕なるぞと有りければ。仰せに任せ瑠璃の盤。黑白の石と入れ。金銀の碁笥添へて。御前ふこそ直しけれ。順女とふ女の姉妹は。色と争ひ打向ひ。心と碎く數々は。天の川瀬の星の影。心お留めてしめやのふ。打つや先手は順女なり。後手はふ女とぞ定めらる。何れ花紅葉。碁石の色は陰陽の。じやうゑの二手打つ音。阿叫の響き備はりて。生死のめいと目前に。涅槃の相と現はせり。打つ手は濱の真砂にて。石のたてさへ女ごの。源氏の巻に手習ふて。優しふも又空蟬や。軒端の萩と争ひて。花と散すや箒木の。その繪合せの勝負に。嫉む心は竹川の。節ある石とさき壺せん。人の打つ手の包め共。白く見へぬる夕顔の。此方のはしとみ縦横に。纏ひて取らん玉のづら。續のぬ石と巻柱。しちやうにいざや掛ふよ。色の二道梅が枝や。紅梅匂ひ薫るとも。分さかぬる手の去とては。身と盡してや宇治橋の。此方へちらと飛ぶ螢。亂れて責る責合の。いざいざ石と二ツ三ツ。よのふし

く竹のふし。逢瀬争ふ勝負は。手と盡してこそ打ふけれ。牽牛立寄り見給ふに。碁の手も切れて一石も。更に對碁と見へにけり。其時牽牛宣ふは。何れと分たぬ其内にも。先手こそは一石の。順女が方に弱味あり。此碁はふ女が勝しぞのし。今宵の寄瀬は御身ぞと。寄添給へば悦びて。嬉しや深き縁ぞと。牽牛の御手と取り。打笑み一間へ入らんとす。順女は氣色替りつゝ。ゑゝ恨めしや嫉ましや。正しく此碁は對碁ぞや。愛くも今の仰せのな。今宵の縁は叶はじと。面色引替へ忽ちに。額と劈くくはばくの角。碁盤の上に立たりしは。叔凄じのりける有様なり。牽牛は御覽じて。ふ女と圍ひて御劔と抜き。向はせ給へば順女は又。ふ女と引裂さ捨べしと。くるりくと追廻すは。凄じのりける次第なり。牽牛今は詮方なく。大悲の御經取出し。心中に讀み玉へば。怨靈次第お足弱車の。彼處へあつばと倒れしが。又起上り口惜や。兎角ふぢよが命と取らんと。飛び掛らんとしたりしが。御經の光明に。便らん力及ばずして。傍なる碁石押取て。はらりと嘯碎き。彼所へくはつと吹き掛れば。猛火となつて燃上り。煙りの内お立紛れ。はや明渡る小夜千鳥。川風と諸共に常の所に臥居たり。斯る所お誰袖姫。尋ねて立入り我夫かど。宣ふ聲に目と覺し。

是はくと斗りにて。御悦びは淺めらす。實ふ邯鄲の飯枕。胡蝶の夢も斯やらん。天晴稀代の事共やと。貴賤上下おしなべて。皆感せぬ者こそなかりけれ。

第六

其後。浮田の左金吾時世は。誰袖姫に巡り合ひ。御悦びは淺めらす。誰袖姫宣ふは。正覺院にて高尾が事。斯様くの有様と。委く語らせ給へば。浮世之介聞し召し。我も夢中お斯る体。是又一定高尾が靈。追善と請ん爲。見ゆると覺へたり。殊に朝日の彌陀如來の。靈驗古今例なき。靈佛にて有りければ。三浦が方へ立越て。此段々と語り。開帳と致しつゝ。諸人に拜ませ申しなば。大きなる功德と云ひ。其上高尾が追善は。是に増たる事あらじ。此義いゝにと申さるゝ。道哲と始めとし。是は宜しき御事や。はや疾々とそれよりも。三浦が方へぞ急がるゝ。彼所になれば案内乞ひ。芳順に對面し右の段々語らるゝ。芳順承り。扱は左様の御事のや。斯る尊き御佛と。諸人お拜ませ申さんと。則ち道哲守り申し。開帳すること有難き。我もくと參詣し。三浦が館は群集なす。斯る所に常麻のづゝら鬼貫は。浮氣に漏れざる寛活者。過し狼藉人知らじと。忍び編笠ふのくと。三浦が

許の朝日の彌陀。拜みながらも色姿。離くと見物し。摺違ふてぞ通りける。次郎冠者にはたと逢ふ。鬼貫は見忘れし。其儘にて歩み行く。二郎冠者は能く見覺へ。君の敵を御參なれ。是屈竟とられよりも。世之介姫に斯と云ひ。人々悦び用意して。芳順にも斯と云ひ。歸ると待こそ不運なれ。是とば知らで鬼貫は。のさくと大門口。歩み出ると町の者。拍子木合せ敵打。通すなと呼はるにぞ。門鎖固め押取捲く。籠の鳥とや鬼貫が。今身の上おぞ知られける。時に人々駈出て。いゝに常麻。見忘れはせじ。齋藤兵衛定房が姪。誰袖夫左金吾なり。脱れぬ所ぞ觀念せよ。いゝにくと詰掛る。鬼貫はつと驚きしが。よししく今は力なし。尋常に立別れて。勝負と決せよ尤と。双方へ立別つて。火花と散して戦ひける。されども左金吾主従は命限りに戦へば。づつうが無二と頼みたる。角田赤堀兩人も手の下に討れけり。常麻今は是迄と。四尺八寸の大太刀。眉間に差のさし。浮世之介に渡り合ひ息と斗りに戦ひけり。元より名に負ふ勝廣が捲り立て討つ程。既に危く見へける時。姫君長刀取直し。因果は廻る車切。はつと斗りと最期にて。終に空しくなりけり。さて左金吾。所の者に一禮して。二度都に歸落あり。富貴の家と榮へける。千秋萬歳

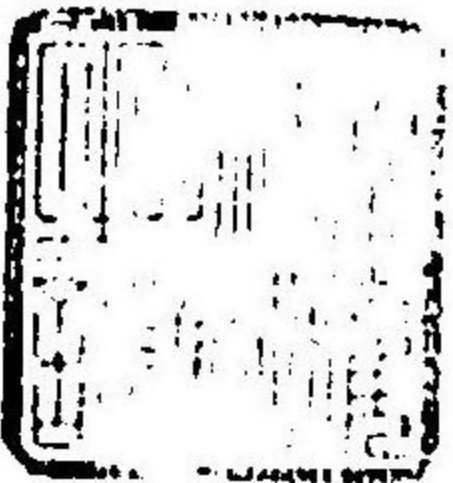
目出度しと。貴賤上下おしなべて。皆感せぬ者こそなのりけれ。

三世二河白道終

明治廿五年九月八日印刷
明治廿五年九月十一日出版

(戲曲叢書第十五冊)

(定價金七錢)



發行者

早矢仕民治

神田區宮本町五番地

印刷者

松本秋齋

本郷區湯島壹丁目拾三番地

發兌元

丸屋書店

日本橋區通三丁目

全

武藏屋叢書閣

神田區宮本町五番地

賣 別 書 肆

神田區南保町
神田區集館内
神田區左衛門町
神田區彌左衛門町
京橋區尾張町
芝南區佐久間町
神田區表神保町

松江堂
黒雲堂
上田屋支店
巖々堂
東海堂
栗ばら堂
中西屋

本郷區元富士町
本郷區四丁目
神田區錦町三丁目
神田區錦町三丁目
神田區北久寶寺町
大坂北久寶寺町
横濱

盛春堂
文壽堂
武藏屋
朝陽堂
有斐閣
丸善書店
丸善書店

京濱吉都町
京濱都町
大坂都町
大坂都町
神戶都町
京濱都町

便利堂
有隣堂
文林堂
博聞分社
吉岡書店
久榮堂
大黒屋

弊店出版の戲曲小説類に付御注告或は御尋問等被成下候諸君にして往々匿名の御狀有之候
て御答申上候事も難出來誠に不本意の至りに存候間何卒御本名住所等御認有之度候

4 2V 35

(叢書閣出版目録)

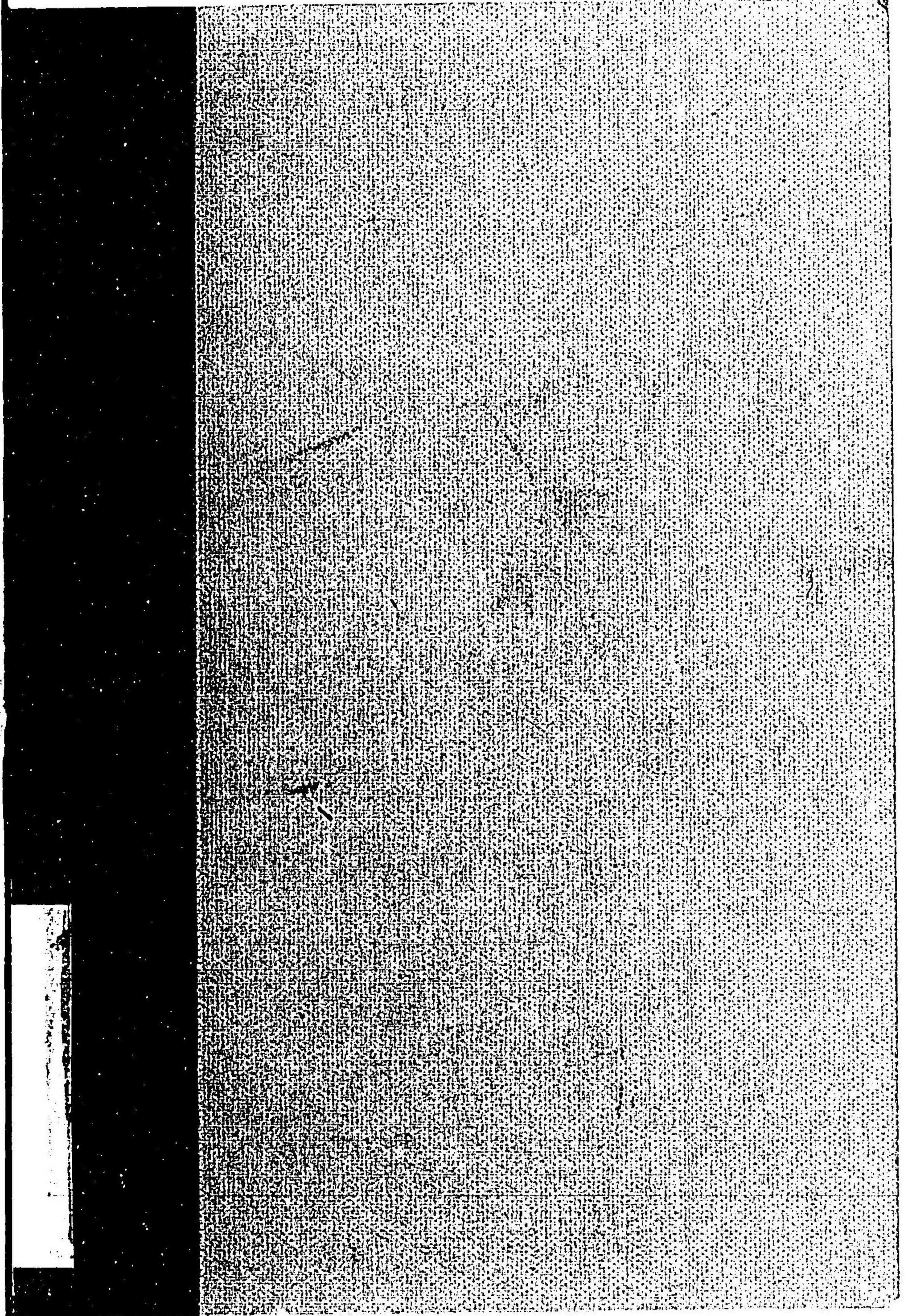
●近松翁作浄瑠璃本

既刊四十六種
卅一冊出版

每冊定價金七錢
每冊郵税金二錢

●近松世話物浄瑠璃完成

- 一 お花 長町女腹切 合卷
- 一 吾妻 淀鯉出世瀧徳 合卷
- 一 源五兵衛 薩摩哥 合卷
- 一 小まゝん 薩摩哥 合卷
- 一 おかめ 卯月の紅葉 合卷
- 一 與兵衛 卯月の紅葉 合卷
- 一 おさが 生玉心中 合卷
- 一 嘉平次 生玉心中 合卷
- 一 女 殺油地獄 合卷
- 一 お千代 心中宵庚申 合卷
- 一 半兵衛 心中宵庚申 合卷
- 一 小春 心中天網島 合卷
- 一 治兵衛 心中天網島 合卷
- 一 一鎗の權三重帷子 合卷
- 一 山崎與次兵衛壽門松 合卷
- 一 丹波眞作 伊達染手綱 合卷
- 一 關の小万 伊達染手綱 合卷
- 一 おふさ 心中重井筒 合卷
- 一 徳兵衛 心中重井筒 合卷
- 一 小かん 心中又氷の朔日 合卷
- 一 平兵衛 心中又氷の朔日 合卷
- 一 おなつ 五十年忌歌念佛 合卷
- 一 清十郎 五十年忌歌念佛 合卷
- 一 あさおひ 卯月の潤色 合卷
- 一 心中 卯月の潤色 合卷
- 一 おきさ 今宮心中 合卷
- 一 二郎兵衛 今宮心中 合卷
- 一 梅川 冥途飛脚 合卷
- 一 忠兵衛 冥途飛脚 合卷
- 一 夕ぞり 夕霧阿波鳴渡 合卷
- 一 伊左衛門 夕霧阿波鳴渡 合卷
- 一 堀川 浪の鼓 合卷
- 一 おむめ 心中萬年草 合卷
- 一 衆の助 心中萬年草 合卷
- 一 おはつ 曾根崎心中 合卷
- 一 徳兵衛 曾根崎心中 合卷
- 一 お島 曾根崎心中 合卷
- 一 市郎衛門 心中二枚書双紙 合卷
- 一 博多小女郎浪枕 合卷
- 一 おさん 戀八卦柱曆 合卷
- 一 茂兵衛 戀八卦柱曆 合卷



912.4

Ki235y

八百屋お七
高尾三世二河白道
紀海音

国立国会図書館

088358-000-3

912.4-Ki235y

八百屋お七・高尾三世二河白道

紀海音／著

M25

DBI-0201

